「残りの民＝切り株」

荻窪栄光教会　中島　秀一



「テレビンの木またはかしの木が切り倒されるとき、その切り株が残るように」。聖なる種族はその切り株である。　イザヤ6・13

CS生徒数が減少しています。子どもが来ないとの嘆きが聞こえます。この状況をいかに捉え、前進していくべきでしょうか。

私はこれまでわが国のクリスチャンが全人口比1％未満であることを残念に思い、何とか1％の壁を越えたいと願ってきました。その背後には1％が少数派であるという認識があったのです。そうした私の思いや考えを根底から覆すような書物に私は最近出会うことができました。それは仁川桂山中央監理教会元老牧師・崔世雄著「残りの民　日本の教会に希望はあるか」です。この書物によって、これまでの私の認識は不信仰であり、自虐的であり、何よりも非生産的なものであったことに気づかされたのです。概要を紹介させて頂きます。

一、残りの民（切り株）の実例　ノアの洪水の時に残されたノアの家族（創7・23）、選民イスラエルの先祖とされたアブラハムの家族（創11・31）、ソドムとゴモラの裁きの際に残されたロトの家族（創18・17～33）、バビロン捕囚によって残された人々、偶像礼拝を拒否したエリヤを含む七千人の預言者（列王上19・9～18）。

二、残りの民（切り株）の意味　切り株は神様にささげられた什一献金のような存在。切り株は根本の役割を果たす人たち。切り株は聖なる種、聖なる末を意味する。

三、残りの民（切り株）への期待　日本には殉教者の血が流されている。青年たちはキリスト教に好感を持っている。日本には信教の自由がある。日本は自国の文化に固執せず、他の文化を吸収できる混合文化国家である。何よりも八千の教会があり、五十四万人の信徒が残されている。

崔師は最後に「日本は伝道ができない国ではない。伝道しない国なのだ」と愛情込めて励まして下さっています。現状に甘んじることなく、悲観的になるのでもなく、発想を転換し、共に喜びと希望をもってCSの働きに当たらせて頂きましょう。

牧羊者

目次

巻頭言 …… 1
目次 …… 2
カリキュラム …… 3
教師養成講座
「分級を充実するために―教員の経験をもとにして―（二）」 …… 4
クリスマス・年末年始 ≪1／5≫ …… 15
旧約⑪「詩歌」 ≪1／12～2／9≫ …… 21
キリストの十字架への道 ≪2／16～3／30≫ …… 51
牧羊ひろば（知多教会） …… 93
「牧羊者」のご購読・ご利用について …… 96
おわりに …… 96

〔凡例〕

1．原語について…ギリシャ語は㋗、ヘブル語は㋭、アラム語は㋐で表記しています。

2．礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ…「こどもさんびか」、こ改…「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教団出版局）、ホ…「教会学校・日曜学校　子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出版局）、イン…「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ…「ふくいん子どもさんびか」、GS…「ふくいんこどもさんびか2　グローイング・ソング」（以上、日本児童福音伝道協会）、PW…「プレイズワールド」（リビングプレイズ）

キリストにある生涯
Ⅱコリント5・17

●クリスマス・年末年始

	行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
1月5日	新年礼拝	キリストによる新創造	Ⅱコリント5・13～19	同17節
1月12日		試練の中の賛美	ヨブ1・1～22	同21節
19日		実を結ぶ生涯	詩篇1・1～6	同2節
26日		主はわたしの牧者	詩篇23・1～6	同1節

●旧約⑪詩歌

	行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
2月2日		避け所なる神	詩篇46・1～11	同1節
9日		み言葉に導かれる生涯	詩篇119・105～112	同105節

●キリストの十字架への道

	行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
2月16日		キリストへの信仰告白	マタイ16・13～20	同16節
23日		十字架を負う生涯	マタイ16・21～26	同24節
3月2日		キリストを見、キリストに聞く	マタイ17・1～8	同5節
9日		一粒の麦として	ヨハネ12・20～28	同24節
16日		洗足の恵み	ヨハネ13・1～15	同8節
23日		天の住まい	ヨハネ14・1～6	同2節
30日		実を豊かに結ぶ	ヨハネ15・1～8	同5節

「分級を充実するために
―教員の経験をもとにして― 二」

神戸中央教会　鎌野健一



前号で四月の分級の取り組みを見ました。今号では、それに続く五月～三月、一年間の残りの部分の取り組みについて、考えて見たいと思います。

教師へ

五月　分級で騒ぐ子どもたち

子どもたちを担任して一カ月もすると、子どもたちの様子が分かってくると思います。それと同時に、子どもたちは教師の癖などを知るようになります。そうすると、今までおとなしくしていた子どもたちも、少しは騒がしくなり、教師を困らすことが多くなってきます。そういう子どもたちの扱いについて少し述べてみます。

子どもたちが騒がしくなる大きな原因は、教師の話に魅力がないことです。教師の話に魅力があれば、ほとんどの場合騒ぐことがないはずです。小学校の教師だって、こちらの教材研究が十分でない時、気分的にすぐれない時は、子どもたちは集中してきません。それと同じように十分な準備がなされていない時、子どもたちが騒ぐのは当然であるということを、まず知っていただきたいです。

一時間足らずの分級、これぐらいなんとかなるという気持ちであれば、子どもたちはきっと騒ぎます。子どもたちがさわぐ根本原因は、あなた自身にあるのです。

騒がしくて、分級を中断させる子どもたちを、あなたは欠席してくれたらいいなあとは思ってはいないでしょうか。騒がしくて、教師を困らす子どもたちほど、大切な宝物はないのです。

そういう子どもたちこそ、あなたの信仰を、祈りを高め、技術をみがく大切な宝物なのです。

わたし自身、その子がよく聞いてくれるためにどうすればよいか、常に考え、展開を工夫していきました。その子どもが真剣に聞いてくれた時ほど感謝な分級はありません。

そのような分級にするためには、まず、「○○さん、静かにしなさい」、「○○さん、騒いではだめです」と言わないことです。それよりも、騒ぐ子の側に行き、祈りの時は頭に手を置き、手を握ってやり祈るのです。話すときには、その子に語りかけてやるのです。そして機会をとらえて誉めてやるのです。子どものよい所を認めてやるのです。一瞬でも逃さずに子どものよい所を見つけ出して誉めてやることです。十分間よかったら誉めるというようなことは思わず、たとえ五秒でも静かだったらその時にほめてやるのです。

別れる時には、肩を軽くたたき、握手して、「来週もおいでね」と、笑みを浮かべて語りかけてやるのです（これは騒がしい子だけでなく、すべての子にしてやるのですが）。

騒がしい子に対しては、ややもすれば愚痴を言いたくなります。それでは、決してその子はよくなりません。その子にこそ、できるかぎり誉め言葉を用意しておきたいものです。その子のよい所を見つけ、その事実をみんなに話しかけるのです。例えば「○○さんは、今日朝早く来て椅子を並べてくれたよ」とか、「片付けを手伝ってくれたよ」などです。

その言葉を出す前には、その事実を造り出すことに心がけましょう。例えば、分級後の片付けに、「○○さん、手伝って」と呼びかけるのです。教師を困らす子ほど、教師の手助けをするのが好きです。ほとんどの場合手伝いをよくしてくれます。

こういうことを通じて、子どもと話し合い、その子の家庭の様子や、学校での様子を知ることができ、その子の騒ぐことの原因を知ることになります。要するにその子をよく知り、認めてこそ、子どもは変わっていきます。

どんな子でも、自分の気がつかないよい点を認められると、子どもは本当にうれしいものです。特によく叱られてきた子、劣等感をもっていた子、気の弱い子には効果が大きいです。これを、騒がしく、みんなに迷惑をかける子にやってみてはどうでしょうか。

毎週、まとめにいろいろなことを書かせていますが、その後に、その子のよい点を見つけ、教師の愛情ある言葉を書いてみてはどうでしょうか。

子どもは、教師の言葉を何度も何度も読み返します。また、

その手紙を家に持ち帰り、お父さんやお母さんにも見せ、親がそれを誉めればその効果は大きいです。

何度も書きますが、騒がしい子、あなたを困らせる子こそ、あなたの信仰生活を充実させ教会学校教師の技術を高めるとともに、教師としての喜びを満ちさせる大切な子どもです。常に祈りと希望と信仰をもって取り組んでください。

六月　話をするための工夫

分級で話を進めていく時、ただ教師が話をするだけでは単調になっていきます。何か工夫がほしいです。今月はこのことについて書きます。

その一つは子どもに活動させることです。一方的に話すだけでなく、子どもに尋ねかけます。

たとえば、「自分の姿を正しく見るためには何が必要であるか、考えさせる」という展開について考えて見ましょう。これを教師が問いかけるのではなく、分級の始まる前に教師の額に墨をつけておき、「先生の顔に墨がついています。これは、今、私がつけたからついているということが分かります。でも知らずに付いた場合は自分では分かりません。自分でついていることを知るにはどうすればいいですか」と問いかけます。すると子どもたちからいろいろな答えが返ってきます。例えば、「友だちに教えてもらう」「鏡を見る」「触ってみる」などが出て来ます。一つだけではなくいろいろと出させます。それから、「鏡を使うと、自分の顔に墨が付いていることがわかるのだね」と押さえ、「自分の姿を正しく見るためには、何かが必要である」とまとめます。

それから次の展開に進めます。「そのものが汚れていては、正しく見ることができない」。鏡に石鹸をこすりつけ、鏡を曇らせます。それを使い、汚れていては正しく見ることができないことを教えます。

そして続く展開、「十戒は私たちの汚れを見つける鏡である」へと進めていきます。

次に、考えてほしいことは、子どもの興味を引くことです。そのためには、いろいろな方法があります。視覚教材を作ること、これは時間がかかり大変なことです。でも意義があることですから、できるだけ努めてほしいです。また、小道具を使うこと、これは案外準備しやすいことです。先の鏡、またインク消しなど身近にあるものを使えばいいのです。

例えば、「わたしたちの罪を消すためには何かが必要である」という展開では、「罪」の字を消すことはできると、インク消し

を使って消してみせます。しかし、わたしたちの罪を消すためには何かが必要なのです。

そして続く展開、「私たちの罪を消す（ゆるす）ためには、罪のないイエス様の十字架の血潮が必要である」と続けます。小道具を使うためには、少なくても一週間前には教案を読み、展開を考えておく必要があります。

分級での話が単調にならないために大切な三つ目のことは、まとめることです。教会学校に黒板がある所は少ないかもしれません。その代わりに、模造紙とサインペン（太め）を準備します。模造紙を壁に張り、黒板の代わりに利用します。まとめるには思いつきでまとめていくのでは効果がうすいです。あらかじめ展開を考え、まとめを下書きしておくことが大切です。また、サインペンは黒だけでなくカラーペンをも使うと見栄えがいいです。

七月　子どもたちに話すときの注意

子どもたちの前に立ち、話すということは簡単なようですが、大変難しいことです。長年教師生活をしている者にとっても難しいことです。今月は話すときの注意すべきことについて書いてみます。

まず注意することは、話す相手が子どもであるということです。大人ならば無理しても聞いてくださいますが、相手が子どもである場合は、難しい言葉を使うならばすぐに騒いでしまいます。仮に騒がなくても、内容を理解してくれません。だから子どもに対しては、できるだけ分かりやすい言葉を使う必要があります。

そのために、教師は、子どもたちの学校で使っている教科書を読んだり、ＮＨＫのＥテレの学校放送番組を見たりしてみてください。子どもと会話をしていくことも大切です。

話すときの注意の二つ目として、自分の癖を直すことです。子どもたちは話の内容よりも、先生の癖ばかり気にしています。自分の話し方の癖を早く見つけそれを是正することが大切です。そのためには自分の分級の話を録音して聞き直してみることが大切です。案外自分の癖はあるものです。

話すときの注意の三つ目は早さです、早口ではせっかくの内容が子どもに理解できません。一分間に三百字ぐらい（低学年ではもっと遅い方がよい）が適当ではないでしょうか。でも、同じ調子では、単調になってしまいますから、ある時は早く、また、ある時はゆっくりとかみしめるような調子で話すことも大切です。また、間をとるということも大切です。これも一度自

分の分級の話を録音して反省してみましょう。

話すときの注意として四つ目は、言葉遣いに気をつけることです。分級で教える子どもたちを友だちとして接することは大切なことです。しかし、友だちに話しかけるような調子で話すのは考えものです。やはり、子どもたちに神を伝え、救いの恵みを体験させなければならない尊い役目が与えられている者として、きよめられた者にふさわしい言葉遣いをしていかなければなりません。キリストのよき香りをはなつ者として子どもたちに話しかけたいものです。

言葉遣いに気をつけることの中で、特に注意することは差別的な言葉です。また肉体的、精神的欠陥をさすような言い方も当然避けるべきです。その場にはいないかもしれません。しかし、子どもたちの中には必ず嫌な思いをする子がいます。一人の子に嫌な思いをさせることは神の栄光を汚すことになります。教師が最も低くなり子どもたちに愛のあるような言葉を使うように常に心がけたいものです。

五つ目には、大きな声を出さないことです。分級の教室が完全に分離されている教会は少ないと思いますから、このことは当然なことです。それだけではありません。子どもたちが騒がしくなる一つの原因は、教師の声が大きすぎることもあります。全員に聞こえる範囲でできるだけ小さい声がいいのです。子どもたちがやかましいから、それを抑える気持ちで大きな声を出すと、もっと騒がしくなります。

八月　夏休みの子どもたち

七月の末ごろから子どもたちは夏休みに入ります。この時期の子どもたちに対する接し方について今月は記してみます。夏休みには、多くの教会学校では夏期学校が持たれることだと思います。その諸注意については別な稿にゆずりますが、夏期学校を十分に生かしてほしいものです。

夏期学校においては、一学期から共に学んできた子どもたちと十分に人間的ふれあいをして頂きたいと思います。自由時間はできるだけ子どもたちと接するようにし、子どもたちの日常の生活ぶりをつかんで欲しいと思います。

普段では一週間に一時間余りしか接することしかできないのが実情です。一泊二日の夏期学校でも四か月分の子どもとの接する時があります。

特にこの時にこそ教師を困らすような子どもたちを中心に話しかけたり、遊びあったりしてください。食事の時、入浴の時が大切です。子どもたちの体を洗ってやりながら語りかける言

葉は子どもの心に強く残ります。

夏休みには、田舎に行ったり、親類の家に行ったりする子どもたちも多いと思います。教師はこの子どもの動静を知ることが大切です。そのためには、分級の話が終わってからの子どもたちとの会話が大切になってきます。分級の話が終わったらこれで終わりだと思わず子どもたちとの接触をはかってください。

田舎に行ったり、親類の家に長期間行ったりする子どもには、日曜日には教会に行くように勧めてください。分かれば教会学校の所在地を知らせてやると親切でしょう。また、紹介状を書いてあげると、子どもは行きやすいと思います。

それと同時に、他の教会学校から夏休みに訪れた子どもたちを暖かく迎えてあげることも大切です。そして出席したことを示すものを与えて励ましてほしいものです。

夏休みに先生がたも旅行されるような時があると思います。そのような時には、是非旅行先から絵葉書を使い子どもたちに手紙を出してほしいものです。教師であったわたし自身、教え子の子どもたちから手紙をもらうとうれしいものです。そのためには、クラスの子どもたちの住所などが、常に手元に準備されていなければならないと思います。

子どもたちに送る手紙の内容は、形式ばらず、創造主である神を賛美するようなものがいいと思います。聖句も書き加えてほしいです。この手紙は、子どもたちだけにとどまらず、家族の人たちにも目にふれるものです。読みやすい字で、丁寧にかいてあげてください。

［夏休みの最後の聖日］夏休み中の子どもたちの出席の様子はいかがですか。欠席が続いている子も多いと思います。今日は分級が終ったあと、クラスの人みんなで欠席の続いている友だちに手紙を書いてあげましょう。来週の聖日は振起日でもあります。寄せ書き形式でもいいと思います。カットも加えてみましょう。一人一人に祈りを込めて書きあげてください。先生も筆不精にならないで、ひと言ずつ書き加えてください。週報などが発行されていたら、欠席の分の週報も送ってあげてください。

十月　聞く態度の育て方

今月は、聞く態度の育て方について書きます。

子どもたちは新しいこと、驚きのあること、感動のあることに対して、非常に関心が深いものです。関心が深いということは、良く聞くということです。しかし、教師の話が子どもの関

心にあっていなければ、どれだけ話し上手でも聞くことはしません。

聖書に書かれていることは、子どもたちにとっても、教師にとっても驚きのあることであり、感動のあることなのです。だのに、聞かないということは、教師自身に責任のあることなのです。

まず、教師自身が驚きをもって分級に接したでしょうか。もう一度新しい感動を受けたでしょうか。これがまず根本問題です。

二つ目には、語りかけがいつも同じセリフではないでしょうか。例えば、「今日はナアマン将軍の話です。みなさん静かに聞いてくださいね。○○さん、ちゃんとこちらを向いて…」。これでは子どもたちはまたかという気持ちになります。「火にあたっていました。火花が飛んできて手のひらに落ちました。『あつい』と言ったのですが、熱くありません…」というように語りかけます。気分がぐんと変わってきます。子どもとの出会いと同じように、はじめの語りかけが大切です。これがうまくいくと半分成功です。

三つ目はつまらない流行語やコマーシャルを言ってはいないでしょうか。子どもたちにおもしろく聞かせようと思って、雰囲気をやわらかくしすぎるようなことはしてはいないでしょうか。子どもたちはしゃべりたいのです。その流行語やコマーシャルが発火点となって、子どもたちのおしゃべりが多くなるものです。分級の雰囲気をこわすようなことは止めておくべきです。

四つ目は教師の話し方です。大きな声でしゃべり過ぎではないでしょうか。前にも書いたように、全員に聞こえる程度のできるだけ小さい声で話すことです。でも口はしっかり開けて、はっきりと話してほしいです。

それと同時に話に抑揚とヤマをつくり、意識的に子どもに飽きさせないようにすることです。声に強弱をつけたり、テンポを変化させたり、急に話を止めたり、感動詞を取り入れて、「おや?」「あっ」等を利用したり、机や黒板を軽く叩いたりして、教師自身が子どもたちを飽きさせないように工夫することが大切です。

最後は、聞かせるに必要な雰囲気づくりです。周りが騒がしかったり、体が触れ合って嫌な感じになったりしてはいないでしょうか。また、教師の方を見ると、まぶしかったり、教師の後ろに動くものがあったりしてはいないでしょうか。これでは関心が他へ移ってしまいます。子どもたちが聞くのにふさわしい

雰囲気づくりを心がけてほしいものです。

要するに、急に子どもたちがよく聞くようになるということは、難しいことです。日々の失敗を繰り返すことなく、十分な準備をなし、子どもたちに接することです。教師に対する信頼感が増すごとに、子どもたちは良くなっていきます。

十二月　クリスマスを前にして

クリスマスを間近に控えて、日々お忙しい時期だと思います。毎年この時期を迎えると感じることなのですが、クリスマスの祝会などの準備に忙しく、最も大切なクリスマスの意義がおろそかにされては、主客転倒です。どうか何が今大切なのかをよくわきまえて分級指導をしてください。

それとともに、子どもたちへの伝道が一番やりやすい時です。クリスマスの礼拝、祝会だけでなく、十二月初めより子どもたちに呼びかけ本当のクリスマスの意味を多くの子どもたちに伝えたいものです。

「クリスマス」クリスマスおめでとうございます。四月以来教会学校に出席した子どもたちがすべて、このクリスマスを教会学校で迎えることができたでしょうか。何かの理由で、教会学校に出席することを途中でやめてしまった子どもたち、このような子どもたち一人一人にも、是非クリスマス礼拝、クリスマス祝会の案内を届けてやりたいものです。教会学校に出席したいと思っていながらも、出席できていない子どもたちを集わすよい機会です。是非、訪問し、案内して上げたいものです。あなたの名簿に記入された子どもたち一人一人にあなたは責任があるのです。

「年末」一年の最後の聖日です、子どもたち一人一人に一年間の感謝をさせたいものです。どんな小さなことでも感謝をささげることを、幼い時から体験させておきたいものです。

さて、子どもたちに新年の挨拶状は送られましたか。子どもたち一人一人に祈りを込めてお送りください。たとえ印刷された年賀状でも、一筆書き添えてください。みことばを書き添えることも忘れないように。両親たちも目を通します。よい伝道の機会であると同時に、両親たちに教会学校のことを知らせるいい機会です。大人たちが一般的に使う難しい言葉は避けるようにしてください。

一月　こんなことをやってみては

今月は「こんなことをやってみては」というテーマで書いてみます。参考になれば幸いかと思います。

まず、聖句の書初め会をやってみてはどうでしょうか。長い半紙を使ってみてはどうでしょうか。分級を少し早い目に終えて、三十分ほど時間を取って見てはどうでしょうか。聖句はそれぞれ自分で選ばせてください。個性豊かな作品ができると思います。これを会堂の壁面の空いている所に展示してください。

聖句かるたを作ってみよう。たとえば、い→「いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛である」（Ⅰコリント13・13）。ろ→「老人たちは夢をみるであろう」（使徒2・17）。は→「はじめに言があった」（ヨハネ1・1）。

このようにみんなで聖句を見つけて文字カードをまず作ります。次にこれにあう絵カードを書きます。抽象的な聖句もありますが、いろいろと工夫してみてください。高学年になると絵カードの代わりに、聖書の個所を書くのもいいかもしれません。聖句を読んで聖書の個所を取る、または、聖書の個所を読んで聖句を取るということもできます。

聖句百人一首はいかがでしょうか。子どもたちに覚えてほしいみことばを百句選んでみましょう。例えば、「こころの貧しい人たちは、さいわいである。天国は彼らのものである」（マタイ5・3）を選んだとします。読み札には全文書きます。とり札には「天国は彼らのものである」と書きます。このようなものを百句作っていきます。覚えてしまうと聖書の個所を言うだけで下の句が取れるようになります。聖書の言葉を覚えるということは信仰を深めるのに大切なことです。その他いろいろなことを考えてみてください。

一月のよい機会に、子どもたちと共に「新年お楽しみ会」を開いてみてはどうでしょうか。日曜日の午後子どもたちを集めます。そしてみんなで作ったカルタや聖書百人一首などを使い楽しい時を送って見てはどうでしょうか。世的な感じがするかもしれませんが、子どもたちと楽しく過ごすことも子どもたちを知り、育てる上に大切なものであると思います。先生がたで「おぜんざい」を作ってみて一緒で食べることも付け加えてください。

二月　子どもたちを成長させるには

四月から担当した子どもたち、すでに十か月がたってしまいました。余すところ二か月です。

スタートは、子どもを知るところからでした。もうすでに、子どもたち一人一人の生活環境、性格、考え方、信仰の度合いなどがお分かりになっていらっしゃると思います。これからは、

それをもとにして、子どもたちを成長させることに努めなければなりません。これこそが、教師のなすべきことなのです。それは、一人一人異なっています。その子が最も必要とすることを見つけていくことが、大切であると思います。

子どもの必要とすることは何でしょうか。教師側から考えれば、キリストに出会わせることでしょう。しかし、子ども側から考えたら、そう簡単に決めることはできません。子ども一人一人にとっては、キリストに出会うことのできないものがあるはずです。ある子にとっては「神様より勉強することが大切である」という親の言葉であるかもしれません。「神様なんかこの世にいない」という多くの人たちの言葉かも知れません。それを教師はみつけなければいけないのです。

子どもの必要とすることを教師が分かるためには、子どもをよく理解していかなければなりません。そのためにこそ分級が必要なのです。子どもが何でも教師に話しかけることのできる雰囲気づくりが大切です。その根本は、教師の信仰姿勢にあると思います。分級の話ではなるほどと子どもたちに思わせるような話をしても、教師の生活態度が愛の満ち溢れたものでものでなければ、子どもたちはすぐ離れてしまいます。そのためには教師自身が偽りのない信仰者でなければならないのです。

十か月も子どもと一緒に過ごすと教師の持っている雰囲気が子どもに移っていきます。学校の教師をしていると恐ろしいぐらいです。そこまでいかないにしろ、あなたの担任の子どもたちに、あなたの信仰態度が移っていくのです。いかに教会学校の教師の信仰が大切なものであるかが分かります。

教師が教案研究をすることは大切なことですが、それにとどまらず、聖書日課を通じて、祈りとともに自分の信仰生活を充実させてほしいです。教団発行の月刊ベラカの聖書日課は教案作成にも大いに役立っています。ぜひ使い終わっても捨てずに保存し、必要な時に利用してほしいです。また、ベラカの「聖書はほんとうにおもしろい」も子どもたちに話すのに役立ちます。

三月　中学科に行く子どもたち

四月から担当してきた子どもたちとの分級もあと一か月になりました。一年間のつながりはとても深いものです。残りの時、十分な祈りをもって見つめていきたいものです。

クラスの中には、この三月に小学科を卒業して中学科に転籍する子どもがいると思います。この三月は特にこの子たちへの指導が大切になってきます。

この期に子どもたちを教会学校から離してしまう場合が多い

のではないでしょうか。もちろん外的要因（学習が忙しくなる、塾へ通う子が多くなる、クラブ活動に参加する子が多くなるなど）もあると思います。

それとともに大切なことは内的要因です。その一つは信仰の未確立ではないでしょうか。この時期にイエス様にお出会いして自分の生活が変わったという経験、教会学校に行くのが楽しくてたまらないという喜び、イエス様はわたしの罪のために十字架にかかってくださったという感謝、これらを自分のものにさせておく必要があると思います。

二つ目は、生き方に対する考え方ではないでしょうか。子どもたちが勉強するのは、自分のためではなく神様を喜ばせるためであり、神の栄光を現わすためであるということをしっかり考えさせる必要があると思います。

しかしながら、小学校から中学校へ進学する子どもたちは、大きな変化を経験します。小学校の先生はどちらかというと親切すぎる面があります。しかし、中学校の先生は子どもの自主性を要求されます。教会学校でも同じような傾向があるのではないでしょうか。卒業する六年生にとっては、抵抗が大きく、中学科になじめない面をもっていると思います。

そこでできれば小学科の先生が四月一か月間中学科の先生と共に指導していく体制を取って見てはいかがでしょうか。せめて春休みの期間のみでもこういう計画があればいいと思います。

［3月最終週］一年間共に学んできた子どもたちとも今日で終わりです。感謝をもって終わりたいと思います。

この子たちに、手作りのカードを贈って見てはどうですか。色画用紙を使いカードを作りましょう。そして、みことば、子どもに対する想い出、祈りと願いを書いてみてください。できればクラスの子どもたちの写真や教師との写真を貼付し、子どもたちに贈りませんか。

終わりに

わたしが教会学校で教えた元気がいい子どもが、良き奥さんが与えられ、四人の子どもにも恵まれ、全員、救われ、その上、彼は、教会役員をして主のために奉仕をしています。わたしにとって大きな喜びです。あなたもこの喜びに満たされませんか。

聖書　Ⅱコリント5・13〜19
テーマ　キリストによる新創造

（鎌野善三）

序論

今週は、新年にふさわしく、「新創造」がテーマとされている。パウロはコリントに住む信徒たちに、キリストを救い主として信じた者はどのような生活をすべきかを教える手紙を書いた。その根本原則が、今日のテキストに示されている〈新しく造られた者〉（原語では、「新しい創造」）としての自覚をもつことである。「新しい」という意味のギリシャ語には二つあるが、「カイネー」という語は質的な新しさを強調している（研究資料参照）。キリストを信じるとき、過去とは全く違った性質が私たちの内に造られ、新しい人となり、その生活が変化するのである。新しい人とは、次のような人と言えるだろう。

一、キリストの愛が迫っている人

パウロは、「おまえは気が狂っている」と言われたことがあった（使徒26・24）。確かに彼の生涯を見れば、普通の人がそう思っても仕方がない。ユダヤ人としての優れた血筋に生まれ、将来を約束されたパリサイ派の律法学者であったのに、それらをみな捨てて、当時「異端」と見なされていた新興宗教に身を投げ打ち、必死になって「キリストこそ神の子、救い主」と宣教して回っていたのだから。彼の根底にあったのは〈キリストの愛〉だった。キリスト信者にひどい仕打ちをしていた自分を、キリストは決して罰することをなさらず、逆に使徒としての重要な働きを委ねてくださった。この〈キリストの愛が…強く迫っている〉ゆえに、パウロはもはや過去と同じ生活はできなくなった。キリストの愛に応える新しい生活が始まったのである。

現代の私たちも、キリストが自分を愛してくださっているという強い自覚があるとき、その生活は変わっていく。その愛に応答していこうとするからである。自分の行動の一つ一つに対し、「愛が動機か、欲が動機か」と自問自答してみよう。

二、古い自分に死んだ人

キリストは、〈すべての人のために死んだ〉ということが、パウロの（そして、すべてのクリスチャンの）確信

である。だが、さらにパウロは続ける。キリストが全人類の罪に対する神の罰をすべて引き受け、十字架で死んでくださったからこそ、すべての人は死んだ（つまり、自己中心的に生きてきた古い自分は死んだ）。そして、これからは、キリストのために生きるようになるのだと。このことが、〈かつてはキリストを肉によって（新改訳では「人間的な標準で」）知っていた〉パウロに大きな生き方の転換をもたらしたのである。

私たちも「肉によって」キリストを知っている段階、言い換えれば、頭だけでキリストを救い主として理解する段階にとどまっていないだろうか。それでは、自分の利益のために生きることしかできない。そういう自分が死なない限り、新しい生活を始めることは不可能である。十分間祈るよりも一時間テレビを見ることを好むことは、キリストの愛を知っている者に相応しいだろうか。

三、新しい自分となった人

過去の自分に死んでこそ、新しい自分となることができる。それが〈新しく造られた者〉である。自分を中心に考える「肉の子」だった者が死んで、神の愛を第一に考える「神の子」としてよみがえることが、聖書の言う「新創造」である。新創造された者は、神と和解するだけではない。さらにこの〈和解の福音〉を人々に伝える者とされる。その実例がパウロであり、彼はこの福音を地中海沿岸に住む人々に命がけで宣教したのである。

新創造された現代の私たちも、もはや神から罰されることはない。決して「ばちあたり」にはならず、日々神から愛されて生きる「新しい自分」となる。このような人は、神の愛を常に喜び、神との交わりである祈りを絶やさない。またすべてのことを感謝して生きるようになる（Ⅰテサロニケ5・16～18）。そういう人こそ、争いの多いこの社会の中で、「平和をつくり出す人＝ピースメーカー」（マタイ5・9）となることを銘記しよう。

結論

キリストは、私たちのために十字架で死んでくださった。私たちも、このキリストと共に十字架につけられたと確信しよう。そして、新しいこの年を、「新しい自分」となって生きていきたい。神と人とを愛して生きていきたい。

研究資料

（井上義実）

テキスト

13　気が狂っているのなら　気が狂う（ギ）エクセステーメン）　パウロの福音にかける熱心さ、情熱は多大なものであった。世の人から見るならば、常軌を逸したものに感じられた。イエス自身も気が狂った（マルコ3・21）と家族からも思われた。気が狂って見えたとしても、その動因は一般的な狂気とは全く異なる。世の人は、パウロに対して「狂気だ」、また「正気だ」と評するが、目的は神のためであり、教会の群れのためである。どちらにしてもパウロには、利己主義は全く見られない。

14　キリストの愛がわたしたちに強く迫っている　パウロは神のため、また他者のために気が狂わんばかりに熱心である。その動機は十字架に命を捨ててくださったイエスの愛である。**強く迫っている**（ギ）スネフォー）　駆り立てる、強いるという強い意味がある。閉じ込める、制限するという意味もある。パウロはキリストの愛に駆り立てられ、キリストの愛に囲まれている。**ひとりの人がすべての人のために死んだ**　イエスの十字架の死は全人類のためであったことが記されている。**すべての人が死んだ**　イエスの十字架の死は、罪に死ぬべきすべての人の死を充足させるものであった。イエスの死がすべての人の霊的な死の代償となった。

15　死んでよみがえったかたのために、生きる　14節でイエスの十字架の死は、全人類の罪の代償であったということが示された。パウロはさらに進んで、イエスの十字架によって罪赦（ゆる）された者は、イエスの愛に応えて生きる者であることを語る。死から命に移されることは、さらに発展的にローマ6・11～14、ガラテヤ2・19～20に語られている。罪に死に、義に生きる信仰者は、義認から聖化へと導かれるのである。

16　かつてはキリストを肉によって知っていた　パウロは肉と霊を相反するものとして、反語的に用いている。肉とは神に属せず、人間や世が持つ性質である。パウロはかつてキリストを肉によって知っていたという。イエスと出会う以前、迫害者サウロの時代に、イエスをユダヤ人の規準で見ていたということである。多くのユダヤ人のようにイエスを律法に反する異端者として考えていた。**今はもうそのような知り方をすまい**　パウロはダマスコ途上で神から

の光に照らされ、イエスの声を聞いた。イエスの真実に目覚め、イエスの十字架の贖い、復活の栄光を知った。回心以来、イエスについての知識は、全く変換したのである。

17 だれでもキリストにある ある（ギ）エン　「～の内に」という前置詞で、パウロが好んで用いる表現である。「キリストのうちにある」とは以下の三つに要約されよう。①律法の下にある（ローマ6・14）とは反対の意味である。②イエスの十字架の贖いによって救われ、個人の関係においてイエスと一つにされている。③救いに与った者たちの共同体の内に一つとされている。だれでもイエスを救い主と信じ、告白するならば神との新しい関係が築かれる。**新しく**（ギ）カイネー　ギリシャ語でネオスも新しいという意味である。ネオスは時間的な新しさを指す。カイネーは性質的に新しいものを意味する。**造られた**（ギ）クティシス　創造するという意味がある。イエスの救いに与ることは、魂に新創造の業がなされることである。**古い**（ギ）アルカイオス　はじめからという意味がある。通常使われるパライオスよりも始原的な含みがある。アダム以来の肉なる性質をも指している。イエスの救いによってすべては新しくされる。**過ぎ去った**（ギ）パレルチョマイ　不定過去形が用いられており、単に「過ぎた」というよりも、「完了した」と訳すべきである。

18 和解させ（ギ）カタラッソウ　この世の和解は、被害、加害の両者の歩み寄りによってなされる。神と人との和解は、本節に「神から出ている」とあるように、神からの一方的な和解の呼びかけである。その結果、神との間に平和が生まれ（ローマ5・1）、神との間に交わりが生まれた。**和解の務めをわたしたちに授けて下さった**　イエスの十字架の贖いによって私たちは救いに与る。私たちのうちに新創造の業がなされる。神との関係に和解が生まれ、平和が与えられる。さらに、和解の務めを受けて、和解の使者とされるのである。

19 和解の福音をゆだねられた 福音（ギ）ロゴス　福音と訳されているが、ロゴスなので言葉である。口語訳聖書でロゴスを福音と訳出したのは本箇所のみである。「和解の言葉である福音、福音の本質であるイエス」を伝える。主によって新しくされた者は、この働きを使命として与えられている。

参考図書　Philip E. Hughes（NICNT, Eerdmans）他

5日　礼拝メッセージ例

聖　書　Ⅱコリント5・13〜19
タイトル　新しく造り変えられる
暗唱聖句　だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。
Ⅱコリント5・17
目　標　キリストを信じて新しく造られた者となる。

導入

（飯田勝彦）

新年あけましておめでとうございま〜す！

皆さんは、どんな思いで新しい年を迎えましたか？皆さんの心は、「今年こそはあれもしよう。これもしよう」と期待でいっぱいだと思います。「今年こそは、教会学校を休まないぞ！」と決意したお友だちがいれば感謝です。

新しい一年も皆さんと一緒に、神様からのたくさんの恵みを頂きましょう。

自分では新しくなれない

さて、今日の聖書箇所には「新しく」という言葉が繰り返されてあります。皆さんのうちで新しい年を迎えて、新しくした物がありますか？　ある人は、新年には新しいシャツやパンツを身につける人や、自分の持っている鉛筆やノートなどをすべて新しくする人もいます。それは、周りの物を新しくすることで、気持ちを新たにしたいという思いが込められているように思います。

私たちの気持ちは、周りの物が変わったからすぐに新しくなるでしょうか。新しい気持ちは、しばらくの間は続くかも知れません。でも、時間が過ぎると鉛筆やノートが古くなるように、私たちの気持ちも変わってしまうのではないでしょうか。

皆さんの中に、「がんばれば、自分は新しくなれる」と思っている人がいませんか。「強い気持ちをもって、そしてしっかりと勉強すれば、新しい気持ちや新しい自分になれる」って。自分の努力で本当に新しくなれるのでしょうか。

本当に私たちが新しくされるには、まず自分の力で新しくなることは出来ないことを知ることが必要です。

イエス様が新しくしてくださる

では、どのようにしたら新しくなることができるでしょうか。また、誰（だれ）が皆さんを新しくしてくださるのでしょうか。それはイエス様です。イエス様だけが、私た

ちの心を新しくしてくださるお方です。

皆さんは「リフォーム」という言葉を聞いたことがありますか？ 古くなった家を修理したり、増築したりして新しくすることです。でも、この「新しくする」は、古い部分が残っています。イエス様は、私たちの古い部分を残して新しくされるのではありません。この古い部分とは、罪です。もし、罪を残しておいて、ただ周りの物だけ新しくしても本当の意味で新しくなったとは言えません。

ある所に、非常に仲が悪く、いつも喧嘩ばかりしている家族がいました。ある時、家が古くなったので家を新しくしました。その家族は、新しい家のために、協力して水道や電気、食費などを節約しました。すると家族に一致が生まれ、仲が良くなったのです。そして、新しい家に引っ越して新しい生活が始まりました。でも、しばらくするとまた前のような仲の悪い家族になってしまったのです。この家族の周りは新しくなりました。でも、家族一人ひとりの心は古いままで何も変わっていなかったのです。

そのように、私たちの内にある古い罪が新しくされなければ、本当には新しくならないのです。

イエス様は、私たちを新しく造り変えることのできる神様です。そのために十字架にかかり、尊い血を流されました。そして、三日目に死より復活されたのです。

自分の罪を認め、イエス様を救い主として信じる時、私たちは新しく造り変えられます。そして、イエス様の復活の命が私たちの内に与えられます。すると、イエス様を愛し、お友だちを愛する新しい心と新しい生活が始まるのです。

「だれでもキリストにあるなら」とあるように、勉強ができる人や心の優しい人、スポーツができる人だけが新しくされるのではありません。イエス様を信じる人は誰でも新しくされるのです。

まとめ

皆さんは、もうイエス様を信じて新しく造り変えられてますか。新しくされると、愛と喜びがあふれてきます。そして、イエス様は一度だけでなく、日々、私たちを新しくしてくださるのです。新しくされる恵みをいただきましょう。

♪歌いつづけよう主のあいを♪（ホ77）

聖　書　ヨブ1・1〜22
テーマ　試練の中の賛美

（高橋頼男）

序論

ヨブ記は旧約の中でも異彩を放っています。ヨブという義人の受けた苦難について記され、全編、友人たちとの論争やヨブの独白が長々と続きます（3章〜42章）。それらを通し、義人がなぜ苦難を受けるのかという人生の不可解、最大の疑問・難問が取り扱われているのです。1章〜2章は、この命題にかかわる問題の提起です。ヨブは神を畏れる正しい人でしたが、サタンの挑戦により、神が許された試練に会い、愛する家族、全財産を一瞬にして奪われてしまいます。しかし、ヨブは、〈主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな〉と告白し、神の前にそのくちびるで罪を犯しませんでした。

一、神が許される義人の苦難（1・1〜2・13）

義人ヨブの経験した苦難はとても理解しがたいものです。なぜ、神の前に正しく生きる者に理不尽きわまりないことが次々起こってくるのか。義なる神はなぜそれらをお許しになるのか。しかも、神は沈黙されその理由をお示しになりません。せめて、苦難の意味を少しでも知らされたなら、神を信じて耐えることも出来るかもしれません。しかし、わけの分からない苦難の連続は、まことに耐え難いのです。「主よ、いつまでなのですか。とこしえにわたしをお忘れになるのですか。…いつまで、わたしは魂に痛みを負い、ひねもす心に悲しみをいだかなければならないのですか」（詩篇13・1〜2）。悪者は滅び、正しく歩む者は祝福を受けるという、旧約聖書の価値観や人生観を超えた課題が提示されているのです。

二、神の主権（1・21）

次々と襲う苦難に耐えながら、ヨブ自身が答えを出したのは、自分の人生の一切の出来事に「神の主権」を認めることでした。〈主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな〉。人生の主人公は「私」ではなく「主」です。人の生き死にを含め、人生の決定的な場面で人間はあくまでも受け身なのです。そのように告白するヨブの信仰はまことに驚くべきものです。目の前で次々に起こった悲惨で悲痛な出来事のただ中に神を認め、ひたすら生ける主を崇めているのです。ヨブの経験した試練を改めて考えて見るなら、ヨブの告白は人間中心の信

仰ではとても推し量れません。ヨブの妻のように「あなたはなおも堅く保って、自分を全うするのですか。神をのろって死になさい」と、とてもじゃないが、もうついていけないという人間の本心が出てしまいます。あくまで神を聖とし、神の主権にひれ伏す神中心の信仰と、神を認めると言いながら、いつも人間の思いを優先し、条件を付ける人間中心の信仰との違いが明らかです。

三、神の慈愛とあわれみ（42・10〜17）

「あなたがたは、ヨブの忍耐のことを聞いている。また、主が彼になさったことの結末を見て、主がいかに慈愛とあわれみに富んだかたであるかが、わかるはずである」（ヤコブ5・11）。神があえて許されることには、神の計り知れないみ心があり、神の真実と神の慈愛、あわれみがあることを受け止める信仰が与えられますように。

神を畏（おそ）れて懸命に生きてきた姉妹が、愛するわが子を二度までも失うという、まことに辛く耐え難い悲嘆のどん底を経験しました。その様子を黙って見ていただご主人が、やさしく語ったのは「神のくださった味噌汁は飲むべきだよ」という勧めでした。神の備えられる味噌汁は、時々辛くてしょっぱくてとても飲みにくいのです。しかし、神がくださったものは、黙して飲むべきだというのです。その理由は「神のみぞ知る…」でした。

マリヤは、その胎に御子を宿すことを「お言葉どおりこの身に成りますように」とお受けした時、その心が刃で貫かれることをもお引き受けしたのでした。

十字架上で、「わが神、わが神、どうして…」と叫ばれた主も、その杯に盛られた苦みのすべてを黙って飲み干されたのです。どんな理不尽と思えることの中にも、神の深いみ心が隠されていることがあります。この地上で起こること、私たちの経験するすべてに理解と納得がいくわけではありません。しかし、すべてのことに神のみ心と神の真実、神の大いなる慈愛とあわれみがあることを信じ、信頼してお従いしていきたいものです。

結論

試練の中で神の前にひれ伏し、その主権を認めて主を告白することができますように。隠された神のみ心と慈愛とあわれみを信じ、すべてを受け止め、神を賛美することができるよう、ご聖霊の助けを祈り求めましょう。

研究資料

（金井由嗣）

ヨブ記概観

「ヨブ記」はヘブライ語正典において「諸書」に分類されており、形式・文体の上からも文学作品として扱うことが適切である。ただし、物語の発端となった事件は実際に起こった出来事であり、その出来事についての伝承が語り継がれていく中で豊かな思想と文学的表現を獲得していったとみなすのが妥当である。そのすべての過程に聖霊の豊かな働きかけを認めることが本書（及び同様の文学書）における「霊感」の信仰である。

信仰者の苦難の問題を扱った本書を理解するためにはテキストの正確な読解とあわせて解釈者自身の人生経験の深みが必要であり、それゆえに様々な人の本書への取り組みに学ぶ姿勢を持つことが大事である。

テキスト

1　ウツの地　哀歌4・21でエドムと関連づけられていることから、パレスティナより南東の土地と考えられる。**ヨブという人がいた**　原文は「ある人がいた。ウツの地に。彼の名はヨブ」。彼はイスラエル人ではなかったことが示されているが、真の神を信じる信仰者であり、主に従う「義人」だった。その点ではメルキゼデク（創世記14章）と同様である。**全く**（ヘタート）　**正しく**（ヘヤーシャール、原義は「真っ直ぐ」）　**神を恐れ**（ヘヤーラー）　**悪に遠ざかる**（ヘサール）　旧約聖書における敬虔を表す用語が四つ重ねられることで、ヨブの信仰が内面的にも実践においても模範的であったことを示している。

2　男の子七人と女の子三人…　旧約聖書において、子どもと財産はしばしば祝福のしるしと考えられた。**東の人々のうちでもっとも大いなる者**　「ウツの地」がイスラエルから見て東方に当たることが示されている。同時に、**東の人々**（直訳は「東の子ら」）という言い方には、まさに彼がイスラエル民族に属していないことも示されている。**大いなる者**とは財産だけでなく、神に従う信仰と人格においても重んじられる人であった。

5　聖別し…燔祭をささげた　ヨブが、隠れた罪や心の中で犯した罪にすらも気を配る「全き」信仰者であったことを示す。家長であるヨブ自身が祭司の役割を果たしていることは、族長時代との類似を示している。

6　神の子たち　天使などの神に造られた霊的存在を指

す。**サタン**　原義は「敵対する者」。ここでは冠詞を伴った普通名詞である。本書ではサタンも神の主権に服していることが明確にされている。悪の起源を単純にサタンに帰することができないからこそ、「義人がなぜ苦しむのか」という疑問が真剣な問題となるのである。

7　地を行きめぐり…　「神の子」に列なりながら、神の全知に挑戦しようとするサタンの不遜さ。「神のようになろうとする」傲慢こそがサタンの本質である。

9　ヨブはいたずらに主を恐れましょうか　ヨブの信仰が、物質的・経済的な祝福に由来する「御利益信仰」ではないか、とのサタンの問いかけである。

12　ただ彼の身に手をつけてはならない　譲歩や妥協ではなく神の主権の範囲内で許されていることは、被害の範囲が厳密に定められていることから明らか。なお、神がサタンの提案を受け入れたのは、ヨブを試みようとするサタンとは対照的に神がヨブを信頼(!)していたからである（グティエレス）。

16〜18　しもべたち…むすこ、娘たち　サタンが奪うことを許される「財産」に奴隷や子供たちの人命が含まれることは、現代人の感覚にはなじみにくい。しかし大切な人の命が奪われたということが真の喪失であり、そこで初めて神の義と愛が問われるのである。親しい者を失うことが実際に起こる人生の現実の中で本書のメッセージを受け取るべきである。

20　起き上がり、上着を裂き、頭をそり、地に伏して拝し　悲報に接したヨブの行動と態度。上着を裂き、頭をそったのは悲嘆の表現であり、彼はけっして感情を押し殺して事態を受容したのではない。それでも彼の行動の中心は主への礼拝であり、悲嘆の中でも神を賛美し神に主権を帰すことは変わらなかった。

21　主が与え、主が取られた　どれほど受け入れがたい事態であっても、ヨブはその中に神の主権を認め、神を賛美する。本書における彼の悩みと問いは、苦難においても神の主権を認めるからこそ生まれるのであり、その答えも神の主権的応答の中から与えられるのである。

参考図書　鍋谷堯爾（新聖書辞典）、ゴルディス『神と人間の書』、ジャンセン（現代聖書注解）、小畑進『ヨブ記講録』、向後昇太郎『主は与え主は取られる』、グティエレス『ヨブ記』、クシュナー『なぜ私だけが苦しむのか』

12日　礼拝メッセージ例

聖　書　ヨブ記1・1〜22
タイトル　どんな時でも賛美しよう
暗唱聖句　主が与え、主が取られるのだ。主のみ名はほむべきかな。　ヨブ1・21
目　標　試練をも神のなさることとして受け止め、神を賛美する者となる。

導入　（飯田勝彦）

新しい年に入り「今年も良いことがあるように」とか「今年こそは嫌なことがありませんように」など、心にいろいろな思いがいっぱいあると思います。季節には春夏秋冬があり、日々の生活の中には雨の日も、風の日も、暑い日もあります。そのように私たちの生活の中には、良いことばかりが続くとも限りませんし、嫌なことばかりが続くこともありません。私たちには分かりませんが神様は起こってくる出来事を通して、私たちを愛なる神様の方へと導いて下さいます。今日は、辛い経験の中で神様を賛美したヨブさんのお話です。

神をおそれるヨブさん

ヨブさんは、彼の住む地域で一番のお金持ち、セレブな人でした。たくさんの子どもにも恵まれ、羊七千頭、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭、それだけでなく多くのしもべも雇っていました。これだけの家畜ですから、もちろん広大な土地も持っていたでしょう。そんなセレブなヨブさんは、どんな人だったのでしょう。裕福で何不自由なく生活していたヨブさんですから、神様を信じて頼らなくても生活できたかもしれません。でも、ヨブさんは神様を心から信じて信頼した生活をしていました。神様をおそれ敬う人だったのです。

また、セレブなヨブさんの財産を目当てに、ヨブさんに近づき、悪い生活へと誘う人もいたかもしれません。でも、ヨブさんの生活は悪いものから離れていました。それは、神様をおそれて生活していたからです。ヨブさんの神様に対する信仰は、神様が認めるほどでした(8)。もし、私たちが「神様、あなたを愛します」と言いながら、神様に喜ばれない生活をしているならおかしなことです。私たちも神様をおそれ、神様に喜ばれる生活を歩みましょう。

試練に合うヨブさん

皆さんの中に、注射が嫌いな人がいるでしょう。痛い

注射は、なかなか好きになれないものです。注射の日が分かっていたらそれなりに心の準備をするかもしれません。そのように嫌で辛いことが起ると予想できていれば、心の準備もできます。でも突然、困難が襲ってくると大変ですね。

幸せに暮らしていたヨブさんの生活に突然、とても辛い出来事が起こりました。大切に飼っていた牛やらくだが奪われ、また羊や羊飼いも死んでしまいました。それだけではありません。ヨブさんの愛する息子たちがみな、死んでしまったのです。何と残酷なでしょう。

もし、皆さんがヨブさんと同じような立場であったらどうでしょう。私たちの人生にも、突然、辛く悲しい出来事が起こることがあります。

神を賛美するヨブさん

ヨブさんは、この出来事を聞くと自分の上着を裂き、頭をそりました。これは、深い悲しみを表す行為です。ですから、ヨブさんは体験した人しか分からない深い悲しみの中に立たされたのです。このような経験をしたヨブさんは神様に対して「今まであなたを第一にして来たのに、どうしこんな酷いことをするんですか！　私はもう、あなたを信じることも礼拝することももしません！」と言ったでしょうか。そう言ってもおかしくありませんでした。でも、ヨブさんは地に伏して神様への礼拝の姿勢をとり「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」と神様を賛美したのです。

何とヨブさんの口から出た言葉は、神様に対する不平不満ではなく、賛美でした。ヨブさんは神様が良いことをして下さるから信じていたわけではなかったのです。与えられる物も取られる物も、良いことも悪いこともすべて神様の御手の中にあり、神様はすべてを知っておられるという神様への絶対的な信頼があったのです。ヨブさんにとっては、良い時だけの神様ではありませんでした。どんな時でも愛し導いてくださる神様への信頼の心が、ヨブさんの口に賛美を与えたのです。

まとめ

ヨブさんが信頼し、礼拝していた神様を私たちも礼拝しています。私たちも心から神様を信頼し、神様を賛美する者にして頂きましょう。

♪主はわたしさえ♪（ホ57）

聖　書　詩篇1・1〜6
テーマ　実を結ぶ生涯

（高橋頼男）

序論

詩篇は、その冒頭を「幸いなことよ」で始め、最後を「ハレルヤ」で結びます。150篇の中身は、苦しみや嘆き、懺悔など、多くの「嘆きの歌」が出てきますが、神は、神の前に真っ直ぐ歩む者に必ずその終わりを「ハレルヤ」で終わらせ、真の幸いに導いてくださるのです。詩篇の序章ともいうべき第一篇には、「幸いな人」とはどんな歩みをする人であるかが記されています。

一、避けるべき歩み、求めるべき歩み（1〜2）

まず、避けるべき歩みについて記されています。それは、悪しき者、罪人、あざける者の歩みに与（くみ）せず、彼らに調子を合わせることをしないことです。神の前に正しく歩まない者たちの三様、「歩む、立つ、座る」を警戒し、これを避ける生活をすることが言われています。

さらに、求めるべき歩みについて勧められています。「幸いなこと」（ヘ）アシュレー）は、「真っ直ぐに歩む」と言う語から出たことばであるというのは興味深いことです。すなわち、真の幸いは神に対して真っ直ぐに歩むことにあるというわけです。人間が神の前に正しく真っ直ぐな道を歩むためには、どうしても神のことば（主のおきて）が必要です。

人が砂漠を歩いて横断する時、方向を定め真っ直ぐ歩き始めても左右どちらかに曲がってしまうそうです。なぜなら人の両足は長さが微妙に違っていて、知らない間に短い足の方向へと曲がってしまうというのです。人は自分の力や頑張りで真っ直ぐ歩むことはできません。人は生まれつきのままでは、たとえ良心的に真面目に歩んでいるつもりでも、どこかで歪み、曲がってしまうのです。ですから広大な砂漠や荒野を踏破しようとするなら必ずコンパスを持ち、絶えず進路を修正することが大切です。それなしに目的地には着けず、行倒れになります。

私たちが人生の荒野を歩む時、たえずみことばを携え、黙想しつつ神のみ心をうかがい、その実現を通してのみ真っ直ぐな歩みができるのです。そのような歩みは安全であり、幸いであり、豊かな実を結ぶものとなるのです。「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です」（詩篇119・105）。

二、幸いな歩みの祝福（3〜6）

神に対して真っ直ぐ歩む人の幸いな人生が、水の流れのそばに植えられた木に例えられています。イスラエルにとって水はたいへん貴重で、いのちの根源です。〈流れのほとりに植えられた木〉とは、灌漑用水路そばに移植された木のことで、自然の木ではありません。そのような木は、根を延ばして水路につながり水を豊かに補給することができます。灼熱の太陽の下でも決して枯れることはありません。厳しい暑さの中で、命の水の補給を受ける木とそうでない木との差は歴然としています。一方は、いよいよ緑の葉を広げ、養分を蓄えて実りの季節に備えます。しかし、そうでない木は、たちまちに枯れてしまうのです。厳しい夏の日照りが続いたある日、すっかり立ち枯れをしてしまった果樹を見ました。残念でたまりませんでした。この木も、本来は豊かな実りを結ぶことが出来たはずだと思うからです。命の水の補給があるかどうかが分かれ目です。

三、我に来たりて飲め（ヨハネ7・37）

わたしたちもかつて、いのちのない世界に生きていた者ですが、神の憐れみとキリストの恵みによって救われ、神の泉のもとに移植されたのです。罪と滅びの荒野で枯れかかっていましたが、「だれでもかわく者は、わたしのもとにきて飲むがよい」（ヨハネ7・37）と言われるお方のそばに移植され結び付いて、命の水の豊かな供給を受けて生きたものとされました。どんな試練や困難、落胆という日照りにあっても、いのちの本源である主とそのみことばにしっかりと結びつき、豊かないのちの供給を受けましょう。そこでこそ得ることができる恵みを知り、実質ある豊かな実りを結ばせていただくのです。

多くの困難、裏切り、落胆の獄屋で、夢を見つつ、ひたすら主を仰いで真っ直ぐな道を歩み続けた旧約のヨセフ物語は、まさしく幸いな人、実を結ぶ生涯の驚くべき実例となりました。

「ヨセフは実を結ぶ若木、泉のほとりの実を結ぶ若木。その枝はかきねを超えるであろう」（創世記49・22）。

結論

あらゆる悪から遠ざかり、むしろ、み言葉を黙想し、み言葉に従って神の前に真っ直ぐ生きることにより、日照りの中でも甘く豊かな実を結ぶ者とならせていただきましょう。

研究資料

（小平徳行）

本篇は、緒論的詩篇として付加されたものと考えられ、詩篇全体の要約といえる。これは知恵の詩として分類され、主題は、神の啓示としての律法に従う正しい者の祝福と、律法を問題にしない悪い者の末路についてであり、それが対照的に描かれている。

テキスト

1　さいわいである（ヘアシュレー）　原文では文頭に来る（新改訳、新共同訳参照）。これは詩篇全体の基調的な思想の一つで、詩篇の中に何度か出てくる（32・1、41・1、119・1、128・1など）。原語は複数形であり、神に義と認められた人の受ける祝福がいかに多様で、大いなるもの、完全なものであるかを示している。この語は「真っ直ぐに歩む」（ヘアーシャル）という動詞から来ていると考えられ、さいわいな者とは、神に対して真っ直ぐに歩む者であるといえる。新約では、この語の七十人訳の訳語であるギマカリオスが神の律法の目的とする所であるとイエスは教えている（マタイ5・3〜11）。**悪しき者**（ヘレシャーイーム）　「義」の反対語で、意図的に神の命令に背く者のこと。**罪びと**（ヘハッターイーム）「的はずれ」を意味する語から来ており、神を知らない人生を送り、習慣的に悪を行う者を指す。**あざける者**（ヘレーツィーム）　誇り高ぶって、聖なることや霊的なことを馬鹿にする者を指す。このように、ここでは罪人を多角的に描写している。また「歩む」「立つ」「座にすわる」という表現は悪の深みに入り込んでいく様を段階的に描いていると見ることができる。このような者でない人が幸いであると、消極的に表現している。悪を捨てることなしに聖なる生涯はあり得ない。

2　さいわいな人が積極的に表現されている。**おきて**（ヘトーラー）　律法だけでなく、神の御旨の啓示としての神のことばを表す。**よろこび**　「固着する」という意味があり、神のおきての中にあることを願い、み言葉を放すまいとする姿を思わせる。新共同訳では「愛し」。**思う**（ヘハーガー）　原語の語根は獅子のほえることや鳩のうめきなどに当てられている。また書物の言葉を小声に出して学んでいる人の姿を指す。新改訳、新共同訳では「口ずさむ」。これは黙想することでもあり、み言葉を心の中にまで至らせようとする態度を指している。こ

のことは神がヨシュアに対しても命じている（ヨシュア1・8）。これが、真っ直ぐに歩むために必要である。

3 流れ 自然の川そのものではなく、灌漑するために作られた水路。**植えられた木** 自然に生えたままの木ではなく、移植されたもの。価値あるものとして選ばれ、手入れされ、間引きを免れた木（マタイ15・13）。**時が来ると実を結び、その葉もしぼまないように、そのなすところは皆栄える** ルターはこの木を「なつめやし」と想像した。なつめやしは常緑樹でナツメに似た長さ5センチほどの果実が房状になり、一房に千個を数え、一本の木に6〜7房つける。木は十分な結実を見るまでには40年を要するが、150年も結実を続け、それから衰え始めるようである。聖書では正しい者の繁栄を象徴するものとして用いられている（詩篇92・12）。ヨセフの生涯はまさにこのようなものであった（創世記49・22）。

4 もみがら 外見は種のように見えても生命がないので根を下ろすことができず、風によって飛ばされてしまう。これは悪しき者の幸せが表面的なものであり、神のさばきに耐え得ない価値のないものであることを意味している（詩篇35・5、マタイ3・12）。エレミヤが表現したように、悪しき者は、湧き水である主から離れて歩み、生命の源によって養われていない状態である（エレミヤ2・13）。

5 正しい者のつどい 信仰者の真の交わりを示す。**正しい者**（ヘ）ツェデク） 「真っすぐである」が本来の意味。神との関係における正しさで、新共同訳では「神に従う者」と訳されている。**つどい**（ヘ）エーダー） この言葉は、他の箇所では、ほとんどイスラエルの「会衆」と訳され、神の民全体を指す。したがって、新約的に表現するならば、罪人は、天の御国に入ることはできないということになる。

6 本篇の要約。**知られる** これは知的認識以上のことであり、愛し、守ること、恵みの中に選ぶこと（アモス3・2）、気を配ることなど、人格的交わりを意味している（Ⅰコリント8・3）。

参考図書 小林和夫「詩篇」『新聖書注解・旧約3』、富井悠夫「詩篇」『実用聖書注解』、鍋谷堯爾「詩篇を味わうⅠ」、C・H・スポルジョン「ダビデの宝庫」（以上いのちのことば社）、青木澄十郎「詩篇の研究」（基督教文書伝道会）他。

19日　礼拝メッセージ例

聖　書　詩篇1・1〜6
タイトル　はい、私は幸せです！
暗唱聖句　このような人は主のおきてをよろこび、昼も夜もそのおきてを思う。詩篇1・2
目　標　悪から遠ざかり、み言葉に生きることにより、実を結ぶ者となる。

導入

（飯田勝彦）

皆さんの中にペットを飼っている人がいますか？　ペットを家族の一員としている人もいるでしょう。なかには、ペットを家で飼い、寝るときも一緒という人もいるかも知れません。ペットをかわいがる時、ペットも幸せに暮らして欲しいと思うでしょう。

もし皆さんに将来、子どもが与えられたとします。自分の子どもが不幸になっても構わないと思いますか？　そんなことはないと思います。元気で、多くの人々に愛されて幸せに暮らして欲しいと思うのは当然でしょう。

それは、神様も一緒です。旧約聖書の申命記11章に「あなたの神、主があなたに求められる事は何であるか。ただこれだけである。…さいわいを得ることである」と書かれてあります。私たちの幸せを一番願っておられるのは、神様です。神様は私たちを愛してやまないからです。

でも、本当の幸せってどのようなものでしょう。お金持ちになること？　勉強ができること？　友だちがたくさんいること？　健康なこと？　皆さんはどう思いますか？　今朝は神様が願い、与えて下さる幸いを見てみましょう。

悪から離れている人

幸せとは…ズバリ「悪いことから離れている人」のことです。

小学6年生の信也くんは、アニメのキャラクターのフィギュアを集めるのが好きでした。おこづかいを貯めて少しずつフィギュアを買い集めていました。よく行く店を通りすぎようとした時、店頭に新しいフィギュアが入っているのが見えました。最初は、通りすぎましたが、気になり戻って外からじっとそれを見ていました。見るたびに、だんだんフィギュアが欲しくなりました。でも、お金はありません。信也くんは、悪いと知りながらも、欲しいという気持ちが強くなって、とうとうお店からフィギュアを盗んでしまいました。自分のものになったフィギュアを見て、最初は喜んでいました。でも、だんだんと後ろめたい思いがあ

り、盗んだものを持っていることが、逆に苦しくなってしまったのです。

私たちの心は、悪いもの「罪」が心にあると平安がなく、幸せとは感じられません。

想像してみてください。皆さんが勉強もでき、欲しいゲームも持っていても、心の中に憎しみやねたみ、嘘などが満ちていたら、幸せだと思うでしょうか。

悪である罪から離れ、罪に心が支配されないことが、本当に幸せな人といえるのです。

主の教えを喜ぶ人

アダムが神様の約束を破り、罪を犯してしまいました。その後、人間や人間の社会は悪に満ちたものになりました。皆さんも、ニュースでたくさんの悲しい事件を聞くでしょう。学校でも、いじめが問題になっています。

そのような悪から離れようとするなら、地球に住めないかも知れません。そんなことは出来ません。大切なのは私たちの心です。心が悪に満たされないで、神様の教えを喜ぶ心がある人は、幸せです。それは、神様の教えは、私たちの心を自由にし、恵みで満たしてくださるからです。その神様の教えは、聖書にいっぱい詰まっています。聖書は、難しい本かもしれません。でも、私たちが幸せになる秘訣が、書かれてあります。聖書は「永遠のベストセラー」と言われ、世界中で読まれている本なのです。是非、皆さんも神様が与えてくださる幸せを得るために、神様の教えに耳を傾け、それを喜びとしてください。

主の教えを思う人

神様の教えを喜ぶ人は、心に深く受け止める人です。食事をよく噛まないと栄養が取れませんね。そのように、神様の教えをしっかりと心の中で味わっていると、み言葉が私たちを悪い思いから、遠ざけてくださいます。また、悪い方に流されそうになった時、心にあるみ言葉によって誘惑に勝利することもできます。

イエス様も悪いものに引きずられそうになった時、み言葉によって勝利されました。

一つでも聖書のみ言葉を覚えて、心に蓄えてみてください。

まとめ

周りはどんどん悪くなっています。でも、皆さんはみ言葉によって「幸せです」と言える人生を歩みましょう。

♪ガリラヤの風かおるおかで♪（ホ21、こ改54）

聖　書　詩篇23・1〜6
テーマ　主はわたしの牧者

（金井信生）

序論

この詩は「主はわたしの牧者（羊飼い）」という告白から始まります。これは、私たちは弱く迷いやすい点で、羊のような存在であり、羊飼いに守り導かれなければならないという思いから出た告白です。羊飼いは多くの羊の世話をしていますが、ここでは「わたしの牧者」として何の不足も覚えていないと信頼しています。

一、養いを与える

羊飼いは、羊を青草の原、憩いの水のほとりに導きます。どこにあるかを知っているからです。また、導かれた羊は黙って草を食べ、水を飲みます。もし羊に、もっと他においしいものがあるよ、と声をかけても見向きもしないでしょう。十分に満足しているからです。また、草と水だけで生きていけるように神によって造られているからです。

わたしたちは、何によって生きるのでしょうか。あれこれと追い求めますが、本当に生きるために必要なものを知っているでしょうか。

羊が食べている草は、人間から見ればおいしいと思えませんし、消化も悪そうです。でも羊がちゃんと生きていくための養分が含まれており、消化できるように十分な体の機能が備えられています。また、羊の腸の中には、様々な微生物がいて、その働きによって草も分解され、栄養が吸収されています。

聖書は、わたしたちの日々に起こる出来事は神様から与えられた教材であり、すべて成長に導くものであると教えています。また、聖書の言葉は、私たちの心の糧となるものです。神に信頼して受け取るなら、悲しいことや辛いことさえも、私たちを豊かな存在へと成長させていくのです。

二、導きを与える

羊飼いは時に、あえて困難な道に羊を導きます。羊は知らなくても、その先に緑の野があり、泉が湧いているからです。もし羊が自分で行きたい方に行ったら、その先に危険が待ち受けているかもしれません。

主イエスも、「狭い門から入りなさい」と弟子に教えています。命に至る道は狭く、滅びに至る道は広いからです。楽な道ばかり選んでいると、必ず後になって悔やむときが来ます。私たちも、もし岐路に立つときがあったら、主が共にいてくださるのはどちらだろうか、あるいは、キリストの足跡はどちらに向いているだろうかを考えて選ぶなら、間違いはありません。そこは困難があっても、心に確信があり、平安と自由があります。

そして「死の陰の谷」を感じるほどに、暗い思いをすることがあっても、災いに目を奪われ、心を縛られることはありません。一切を知っておられて、その先の祝福に導こうとしておられる主がおられるからです。

そして、主の導きに従っていくとき、4節からは、今まで「主」と呼んでいたのが「あなた」と親しい交わりに深められていきます。

三、守りを与える

牧者である主に導かれる地上の生涯は幸いですが、まだ天国ではありません。時に私たちを苦しめる敵が現れるときがあります。でも敵を恐れたり、私たちが立ち向かう必要はありません。聖書に繰り返されているのは、主からの「恐れるな」という励ましであり、「わたしが戦うから、あなたは静かにしていなさい」という約束です。

私たちが自分でできると思うとき、無謀な戦いや無益な戦いをしてしまうことがあります。むしろ、主の備えておられる食卓に着いて、主を喜んでいるときに、いつしか敵の姿は消えていきます。

このように主に信頼していくとき、私たちが祝福を追い求める必要はありません。「恵みと慈しみはいつもわたしを追う」（新共同訳）のです。そして、人生の最後には、帰るべきところがすでに用意されています。主は最後のゴールで手を広げて待っている方ではなく、今日この日から私たちをゴールまで守り支えてくださっています。

結論

イエスは、「わたしは良い羊飼いである」と私たちを招いておられます。羊のために命を捨ててくださったこのお方に、「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない」と感謝をもって申し上げ、主と共にこれからも歩んでいきましょう。

研究資料

（小平徳行）

本篇は、牧者として、その民を導き守ってくださる主に対する感謝と信頼に満ちた詩である。スポルジョンは「詩篇の真珠」と呼んだ。前半（1～4節）は主を牧者にたとえ、後半（5～6節）は客をもてなす主人にたとえている。

テキスト

1　主はわたしの牧者　神は羊飼いとして、その民イスラエルを守り導かれるお方である。このような告白はイスラエルの歴史の古くから見られる（創世記49・24、イザヤ40・11、エゼキエル34・11など）。また支配者や王も牧者と表現された（サムエル下5・2、7・7、エゼキエル34・2）。ここでは、神とその民一般との関係ではなく、「わたしの牧者」とあるように、神との個人的な関係が告白されている。神を牧者として表すことは、同時に自分を羊にたとえることを意味する。羊が弱く、自己防衛力を持たず、近視眼的で迷いやすい動物であるように、自分もそのような存在であり、羊飼いである神に全存在をゆだねていることを告白している。また羊は財産として飼われているゆえ、所有者はこれを大事にする。神は羊飼いであると共に、所有者である。ダビデは自分が主のものであることを自覚して、信頼していた。**乏しいことがない**　主は必要を満たしてくださるお方。この事はイスラエルの歴史において、特に荒野の40年間の旅路において体験された事実である（申命記2・7）。

2　緑の牧場　柔らかい草の生えている場所。**伏させ**　安心して草を食べ、身を横たえることのできる安全な状態を意味する。**いこいのみぎわ**　疲れと渇きをいやす水が豊かにある所。牧草や水はいずれも羊の生命を支えるものであるが、パレスチナにおいて牧草と水は乏しく、優れた牧者によってのみ探し当てられる。か弱い羊の一切は牧者にかかっており、牧者なしには飢えと猛獣の危険からの保証はない。

3　主はわたしの魂をいきかえらせ　弱っている魂に生命の活力を呼び戻すこと。特に、霊的な食物である神の言葉によって養われ、神との関係の回復や深化によって魂の平静が与えられること。**み名のために**　救い主としての神のご性質にあずからせるため。聖なる神はご自身の民も聖であることを望まれる。**正しい道**　誤りのない

道、または救いに至る道と解釈することもできる。「義」は両者の真っ直ぐな関係（最も近い関係）を表わす。

4 死の陰の谷 狭く険しく見通しのきかない場所。パレスチナには深い谷があり、猛獣がそこに住んで、しばしば羊を襲ったと伝えられている。**むち**（ヘ）シューベト）「杖」とも訳される。先に鉄の金具の付いたこん棒で、獅子や狼を追い払うために用いられた。**つえ**（ヘ）ミシュエネース）「よりかかる、支える」という動詞から派生した語で、曲った柄のついた大きな杖のこと。山路を歩く時の支えや羊を数える時、さらには迷いやすい羊を懲らしめるために用いられた。**慰めます** 新共同訳は「力づける」。保護と導きだけでなく、懲らしめや訓練を慰めと捉えている。

5 敵の前で…宴を設け 遊牧民の生活において、逃亡者は天幕の主人の好意によって安全を保証される。主の守りは、敵の前で平然と食事ができるほど安全で確実である。アブサロムの追手を目前にしながら、バルジライにもてなされたダビデの体験は、このような主の守りの具体例である（サムエル下17・27〜29）。**油をそそがれる** これは任職の儀式としての油注ぎではなく、喜びの象徴である（詩篇45・7、133・2）。主人が客人の頭に油を注ぐことは、パレスチナでは客を歓迎する時の習慣であった。**杯はあふれます** 豊かなもてなしを受けている様子であり、主のあふれる恩寵を歌っている。

6 わたしの生きているかぎり 直訳すると「生涯のあらゆる日々」。順境の時も逆境の時も。**恵み**（ヘ）トーブ）「善」「良い事」の意。**いつくしみ**（ヘ）ヘセド）契約に基づく愛を意味する。**伴う**（ヘ）ラーダフ）「追いかける、追い回す」の意。主に従う者には恵みが追って来るが、悪者には暗闇と滅びが追いかけてくる（詩篇35・6、140・11）。**わたしはとこしえに主の宮に住むでしょう** ダビデは神との交わりの場である神の宮で過ごすことが最大の喜びであった（詩篇27・4、61・4）。「主の宮」は現実の神殿の建物ではなく、神の名の置かれている場所、神がご自分を啓示される場所。イエスは万人が祭司として主の宮に住む事ができるように、私たちが自由に神との交わりにあずかれるようにしてくださった（ヘブル10・19〜25）。ダビデは新約的な信仰を先取りしていたといえる。

参考図書 1月19日分と同じ。

聖　書　詩篇23・1〜6
タイトル　イエス様は、わたしの羊飼い
暗唱聖句　主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。　詩篇23・1
目　標　主を牧者として生きる生涯の幸いを味わう者となる。

導入

（飯田勝彦）

皆さんは、歌手のアンジェラ・アキさんを知っていますか？　彼女は「手紙〜拝啓十五の君へ〜」という歌の中で、「十五の僕には　誰にも話せない悩みの種があるのです」と歌っています。皆さんの心の中に今、悩みの種はありますか？　私たちは、いくつになっても様々な悩みや困難を抱えてしまうものです。でも、そのような中にあっても、幸いな人生を過ごしたいと強く思います。その秘訣が、今朝の詩篇に記されてあります。

羊のように弱い私

1節のみ言葉は新改訳聖書で「主は私の羊飼い」となっています。聖書には、多くの動物が登場しますが、その中でもよく出てくるのが羊です。皆さんがよく知っているダビデも家の羊の番をしていました。羊は珍しい動物ではありません。イスラエルでは、生活には欠かせない動物でした。実はこの羊、とても弱くて迷いやすく一匹では生きていけない動物だと知っていましたか？

皆さんの中に「自分は強い！」と思っている人がいるかも知れません。でも、私たち人間は羊のように弱く、一人では生きて行けないのです。よく考えて見ると私たちは「オギャー」と生まれた時から、両親を含めて多くの人々のお世話になって今があります。それを忘れてしまうと、自己中心な生活になってしまいます。私たちが幸せな人生を歩むにためは、自分が弱く、多くの助けが必要だと認めることが大切です。

主は私の羊飼い

羊には、羊飼いが必要です。羊たちは、羊飼いの言うことを聞かないと迷子になって、他の動物に襲われてしまうこともあります。羊飼いは、大切な羊一匹一匹をしっかりと覚えています。そして、羊飼いは羊の健康に心を配ります。また、羊が安全に過ごせるように必死に羊を守ります。そして、美味しい草のある所に導くのです。羊は、羊飼いがいることで安心して過ごすことがで

きるのです。

私たちも、私たちの幸せを考え、導いてくれる人が必要です。皆さんのそばには、そのような人がいますか？私たちの羊飼いとなってくださるのが、イエス様なのです。イエス様は、優しい手を私たちに差し出してくださいます。

「イエス様、私の羊飼いになってください」と私たちがイエス様の差し出された手を握るなら、イエス様は、しっかりと私たちの手を握り返してくださいます。そして、その手を離さず、いつも共にいてくださいます。皆さんはイエス様を「わたしの羊飼い」として迎えているでしょうか？

私には乏しいことがありません

私たちの周りには多くの物で溢れています。100円均一のおかげで、簡単にしかも安く手に入れることができます。でも便利な反面、「どうせ100円だから」と大事に物を使わなくなっていないでしょうか。そして次から次へと新しい物を手に入れても「まだ足りない。もっともっと…」といつまでも満たされない気持ちで不平不満が心に満ちていないでしょうか。今朝の詩篇には、びっくりすることが記されています。「わたしには乏しいことはない」（1）。これはすべてに満たされて安心していることの告白です。

どうして、そのように言えるのでしょう。それはイエス様が「私の羊飼い」となってくださっているからです。イエス様は、私たちの心をいきいきとさせてくださり、正しい道に導いてくださいます。人生の中で苦しく辛いことがあっても、イエス様はいつも共にいて慰めてくださいます。恐れるようなことがあっても、変わらずに祝福を注ぎ続け、いつも恵みを与えてくださいます。

いろいろな悩みが多く、実際に悩んでしまう私たちです。でも、心をイエス様に向けるとき、「あっそうだ。イエス様は、私のことをすべて知ってくださり、いつも共にいて必要な助けと慰め祝福を与えてくださる！　それならば、私は乏しいことがない」と告白できるのです。

まとめ

イエス様を「私の羊飼い」として、心にお迎えしましょう。弱い自分を知るほど、イエス様の優しさ素晴らしさを体験でき幸いな生活を送ることができるのです。

♪しゅイエスのひつじ♪（こ49、ホ28）

聖　書　詩篇46・1〜11
テーマ　避け所なる神

（金井信生）

序論

この詩篇が作られた背景には、イザヤ36〜37章に記されている、神がご自身の民イスラエルを不思議な力で助けられた出来事があるといわれ、危機的な状況にあっても、神に頼る者の幸いを高らかに歌っています。

一、神に逃れる告白

1節の〈避け所〉は「敵の手から身を隠すことのできる場所」、「安全な場所」という意味があります。11節の〈避け所〉は「とりで・やぐら」の意味で、敵を見張り、そこに逃れこむことで守られます。

いずれにしても、この詩は四面楚歌、八方塞がりとなる状況において、全能なる神の力に頼り、身を寄せる時、主はその力を発揮して守ってくださることを信じ告白する歌です。

また、〈いと近き助け〉は、決して離れることがないと主が約束しておられるからです。危機に陥ってあわてて神を探し求めるのではなく、平穏な時から、主が共におられることをおぼえて歩んでいるからこそ、どんな時でも主に祈って助けられます。

二、変わるものと変わらないもの

〈地は変り〉、〈山は海の真中に移る〉、〈水は鳴りとどろき、あわだつ〉、〈山は震え動く〉と、自然の災害は人間の力をはるかに超えています。また人間社会の変化も、予想を超えて起こり、決して不変なものはないことを教えられます。その中で変わることなく私たちを愛し導かれる方に支えられていることが幸いです。

〈川〉は命を支え、「祝福」や「救い」を象徴しています。自然の川は枯れたり、汚染されることもあります。この〈川〉は主のもとから流れてくる恵みの川です。「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」（ヨハネ7・37〜38）と主イエスが約束されている、聖霊による尽きない恵みです。

この恵みに生かされていると、どんなに世の中が騒が

しくなっても、確かな平安に立つことができます。主がより頼む者の救いを最優先し、すみやかに手を差し伸べて私たちの心を守ってくださるからです。

主が〈朝はやく〉助けてくださるのですから、私たちも主との交わりを第一とし、一日を始めることが大事です。

三、主の前に静まる幸い

〈静まって〉とは、「やめよ」という命令です。人間のわざをやめて、神を知れと命じられています。

「やめる」のは、互いの欲から出る争いや、罪の行いもあります。それだけでなく、一切限定がなく「やめよ」と命じられているのですから、あらゆることをやめて、ただ神だけを思いなさいととることもできます。

礼拝をささげる時には、生活を支えるための一切を置いて主の前に出ます。日々の歩みでも、ふだんは自分の知恵や力、世にあるものに頼って、困ったときだけ主を求めるのではなく、自分の力により頼むことを全てやめて、身も心もあらゆる点で神に委ねることも示されます。

「やめよ、知れ」と命じられている前には、8節に〈来て、…見よ〉と命じられています。主を仰ぎ見、あらゆることをやめてただみ言葉の前に聞く静まりから、主への信頼が堅くされていきます。

「神を知る」とは聖書を通して神についての知識をもつことであり、個人的な神体験を通して、神が避け所、力、とりでであることを知り、また、神が世界を治めておられることを知ることです。

神は平和をもたらすお方です。国と国との平和と同じように、私たちの身近な人との間にも和解をもたらされるお方です。私たちが自分の思いをささげて主の手に服し従う時に、どんな危機的な状況にある困難や人間関係にも、主の救いが現され、主の御名をほめたたえる喜びに導かれます。主のもとに逃れる者は、そこで取り扱われ、主の御旨の内に生きる者へと造り変えられていくのです。

結論

神は困難な時も平安な時も、いつも私たちと共におられます。どんな時も神に信頼し、心に抱く平安が主にある互いの平和へと広がっていくことを信じましょう。

研究資料

（小平徳行）

本篇は信仰による確信の詩篇であり、主題は、主が共におられることこそ平和と安全の保証であるということ。マルティン・ルターが作詞作曲した讃美歌「神はわがやぐら」は本篇がもとになった。この詩は、伝統的にはＢＣ701年にエルサレムがセナケリブ率いるアッスリヤに包囲された時、主の奇跡的救助がなされた出来事（イザヤ36、37章）が背景となっていると考えられている。区分はそれぞれ「セラ」で終わる3つの部分に分けられる。「セラ」は休止符と考えられ、そこで休止し黙想すべきことを示しているのであろう。

テキスト

女の声のしらべ　かん高い音を出す楽器の事を指していると考えることもできるが、この歌の音楽がヘブル人のおとめのソプラノ音域の高い調子に合わされるべき事を意味しているのであろう。どのような調子で歌うかは大切なことである。神を純真に恐れる魂をもって、生き生きした気高い表情と喜びの歌をもって、神をほめたたえなければならない（スポルジョン）。

1　神はわれらの　神と詩人を含めた共同体との関係が表現されている。**避け所**（ヘ）マハセ）　風や嵐を避ける岩陰や、強い日照りをさえぎる陰を意味する。**力**（ヘ）オーズ）　「要塞」とも訳すことができる。避け所が消極的救助の側面であるのに対し、こちらは積極的救助の側面を述べている。神は創造主また贖い主として、歴史の中でその力を示し続けておられる。**いと近き**（ヘ）ニムツァー・メオード）　「見出す」または「見出される」と訳すことができる（新改訳では「そこにある」）。神こそ、最も近くにある助け主であり、友人や身内よりも近く、さらには苦しみそのものよりも近い存在である。**助け**　単なる助けではなく、救助の際の助け手のこと。

2〜3　これは想像の及ぶ限り最も恐るべき激変を表わしている。神の創造の秩序を乱すような混沌の様子が描かれているともいえる。これらに象徴されるような、人生における最悪の事態に直面しても恐れないという、主への絶対的な信頼が告白されている。**このゆえに**　恐れない理由は、神が1節のようなお方として、詩人の人生に経験されているため。**地は変り**　世の終わりが来たかのような大地の震撼。**山**　聖書においては動かないもの

の象徴。

4 一つの川 エルサレムには川はないが、神の民に命を与える神の臨在を川にたとえていると考えられる。川は神の祝福による生命的な充実を象徴しており（エゼキエル47・1～12、黙示録22・1～2参照）、さらには聖霊を象徴しているといえる（ヨハネ7・37～39）。アッスリヤ来襲からの救助という背景から、この川はヒゼキヤ王の掘ったギホンの泉を源泉とする水道を暗示していると考えることができる。これはヒゼキヤ王がエルサレムを守るために籠城（ろうじょう）用に造ったもので、城壁内に水を引いて給水設備を強化するために、トンネル水路を掘り（高さ120cm、幅60cm、全長533m。）、大土木工事を完成させた（列王下20・20、歴代下32・30）。

5 神がその中におられるので、都はゆるがない 神の都の堅固さはその城壁や設備のゆえでなく、神の臨在による。神の都はどんな天変地異にもびくともしない所である。**朝はやく** アッスリヤ軍の総攻撃の始まる前に、主が敵を打ち破った事実を指しているのかもしれない。

7 万軍 イスラエルの軍隊または天体、天使、霊的存在などを指す。**避け所**（ヘ）ミスガーブ 「高く上げる」から出た言葉で、信仰者は神によって安全な高みに上げられる。

8 来て…見よ 後の礼拝者への招待の声、または歴史的事件としてのアッスリヤの大軍の敗北を確認するように促している言葉ともとることができる。**驚くべきこと**（ヘ）シャームマー 驚きのあまり呆然とするような破壊のさまで、神の審判を表わす。新改訳聖書では「荒廃」。

10 静まって（ヘ）ラーファー 「放棄する」の意。これは諸国に対して言われていることとも、イスラエルに対して言われていることとも取ることができる。後者なら、イスラエルが異邦諸国との同盟や協力に拠り頼む事をやめ、主にのみ全く信頼せよとの命令となる。静まることは神への信頼であり、勝利への道である（イザヤ7・4、30・15）。**わたしこそ**（ヘ）アノーキー 強調形。神がご自分のことを啓示する時に多く用いられている。**あがめられる**（ヘ）ルーム 「高くされる、上げられる」の意。

参考図書 1月19日分の他、鍋谷堯爾「詩篇を味わうⅡ」、C・H・スポルジョン「ダビデの宝庫2」（以上いのちのことば社）他。

2日　礼拝メッセージ例

聖　書　詩篇46・1〜11
タイトル　神様が避け所…だから大丈夫！
暗唱聖句　神はわれらの避け所また力である。悩める時のいと近き助けである。詩篇46・1
目　標　困難や試練の中で、神を避け所とし、神に近づく者となる。

導入

皆さんは、「八方ふさがり」っていう言葉を聞いたことがありますか？　どちらを向いても道が塞がってしまっている…もうどうすることもできない、という大ピンチのことです。昔、イスラエルの国をヒゼキヤという王様が治めていた頃、敵がものすごい大軍で押し寄せてきて、まさに八方ふさがりになったことがありました。でも、「神様、どうか助けて下さい！　あなたの大きな力を信じます！」と祈ったとき、神様がお応え下さり、不思議な方法で勝利を与えて下さったのでした。その後でこの詩が作られたのですね。私たちの人生にも、八方ふさがりのときがあります。でも、どんな大ピンチでも、神様を信じている人は絶対に大丈夫なんですよ！　なぜかな？

（和田　治）

逃げ込もう！　神様のもとに

「神はわれらの避け所また力」とありますね。避け所ってなんでしょう？　どんなに強い敵からも隠れることのできる場所、「ここなら絶対に安心だ」っていう安全な場所のことです。神様は信じる私たちの避け所なのです。

神様という避け所に逃げ込めば、不思議な力が与えられます。苦しいこと、辛いこと、耐えられないような悲しいことが起こっているのに、心には平安があるのです。湖の表面が嵐の中で大荒れに荒れていても、深い湖の底は静かですよね。そのように、神様が下さる確かな平安でびくともしない…そんな力が与えられます。

そして、「悩める時のいと近き助け」とありますね。「こんなちっちゃな悩み、神様はいちいち助けてくれないよ」とか、「あまりにも悩みが大きすぎて、神様だって助けられないよ」なんて思うことがありませんか？　大丈夫！　どんな悩みのときも、神様はすぐそばにいてくださって、一番良いときに一番良い方法で助けて下さるのです！

どうしたら助けてもらえるの？

「う〜ん、でも、神様は目に見えないし、声も聞こえないし、どうやって助けてもらったらいいのかな？」

実は、この詩にはその答えが示されているんです。

まず、「神様は決して変わらないお方」だと信じることです。「たとい地は変り、山は海の真中に移るとも、われらは恐れない」ってありますね。海や山もときには、信じられないような勢いでその姿を変えてしまうことがあります。「まさか、そんな！」っていうことがあるのです。でも、神様は聖書に書かれている通り、永遠に変わらない愛、何があっても裏切らない愛の神様なのです。

次に、「神は朝はやく、これを助けられる」とありますから、一日の始まりに、まず神様にお祈りすることです。皆さんは朝起きたら、まず何をしていますか？　明日の朝から、ぜひ、まず一番に「天のお父さま…」と、一日に備えて祈りましょう。神様は聞いておられます。

さらに、繰り返し「共におられる」とありますから、いつも一緒にいて下さることを忘れないことです。ピンチになってから大慌てで、「ああ、神様、どこにおられますか？　助けてくださ～い！」ではなく、いつも神様が二人三脚で一緒に歩いていて下さると信じるのです。自分の力で何とかしようとすることを止め、心を静めます。そして、「悔い改めるべき罪はないかな？　今、神様は何を求めておられるのかな？」と静かに思い巡らすのです。普段からそのように神様と交わりながら歩んでいると、ピンチのときもすぐに神様に助けていただけますよ！

ルターの体験

マルティン・ルターという人がいました。今から500年ほど昔、ドイツで「宗教改革」というとっても大切なことのために用いられた人です。それまでのローマカトリック教会の過ちを鋭くついて、「聖書に立ち返れ！」と迫り、当時の国の指導者たちからひどく攻撃されました。ルターを裁く宗教会議に呼ばれた時、恐くてたまりませんでしたが、神様から特別に勇気をいただいて、従い通したのです。宗教会議の場に行く時、ルターは友達に「たとえ、あそこに集まる悪魔の数が、屋根の瓦ほどあったとしても、私は行く！」と言いました。やがて彼が、詩篇46篇から作った讃美歌が、『神はわがやぐら』です。

結び

イエス様を信じる私たちにとって、神様は今も、そしてこれからも　ずっと、『避け所、力、すぐそばにある助け』です。だから大丈夫！　神様を信じて前進しよう！

♪神はわがやぐら♪（新聖歌280）

聖　書　詩篇119・105～112
テーマ　み言葉に導かれる生涯

（金井信生）

序論

詩篇119篇は、聖書の中でもっとも長い章（篇）です。〈アレフ〉から〈タウ〉まで、ヘブル語のアルファベット22文字ごとに、その文字から始まる言葉が連なって一つの連になっています。

全体の内容は、1節に「おのが道を全くして、主のおきてに歩む者はさいわいです」とあるように、主のみ言葉に聞き従う幸いを歌っています。

一、み言葉は光

私たちの歩みは、闇の中を歩んでいるように思うことがしばしばです。自分がどこから来て、どこに行くのか不確かなことが多くあります。また、これから足をおろし、踏み出そうとするときも確信を持てないことがあります。そのような時にも、主のみ言葉は、今足を降ろす、その歩みにおいて足元を照らし、一歩一歩を確かなものとします。

今までの歩みを振り返り、反省することができても、取り返しがつかないこともあります。やがて神の前にさばかれるとしたら、恐ろしいことです。これも主のみ言葉によって赦された確信と喜びを得ることが幸いです。

そして、これから先に何が起こるのか、その時にどう対応するのかについて、み言葉には世の終りに至るまでの約束があります。トンネルの向こうに光がともっているように、必ずゴールがあることを教え、向かうべき方向を示しています。それでも、そこまでの道が照らされていなければ、危険が一杯です。やはり、今、足もとが確かなものとされなければなりません。

毎日の歩みにおいて、また人生の節目において、主の言葉を求め、御言葉に導かれる歩みが大事です。

二、苦しみの中で

この〈ヌン〉の連は、全体としてピンチに陥っている中から主に呼び求めている姿がうかがえます。

107節には〈わたしはいたく苦しみました〉、また110節には〈悪しき者はわたしのためにわなを設けました〉とあります。そんな中で人の助けにまさって頼りとし、助けとなっているのが、主のみ言葉です。つまり、み言葉へ

の信頼は主への信頼そのものなのです。

主イエスの生涯も、み言葉に聞き従い、守られ、敵に打ち勝つ勝利の歩みでした。荒野での悪魔からの三つの誘惑に対しては、申命記のみ言葉をもってすべて退けられました。

十字架上での「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイ27・46）、また「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」（ルカ23・46）との言葉も、それぞれ詩篇22篇また31篇の言葉に基づくものであり、救いの道が開かれたことを確信される言葉でした。

神を信じるとは、み言葉に聞き従うことです。試練の中で祈り求めたことは、必ずしも私たちの願う時期や方法で答えられるとは限りません。その中で、神は私に何を教え、聞かせようとしておられるのか、み言葉に聞こうとする時に、心の内に光が与えられ、ためらっていた歩みをまた一歩正しい方向に進めることができるのです。

三、み言葉が伴う歩み

主のみ言葉に聞いて従っていく時、共に歩んでくださる主の恵みが確かになります。この詩で〈あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光〉とあるのを受けるかのように、主イエスは「わたしは世の光である。わたしに従ってくる者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」（ヨハネ8・12）と約束されました。

み言葉に照らされることを忘れて、自分の考えや思いで進もうとすると、ほんの小さなことでつまずいてしまいます。「神に聞いてもらおう」と思うより、「み言葉によって神の思いを聞き、従おう」と心がけているなら、つまずくこともつまずかせることもありません。

「もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう」（ヨハネ14・23）。これも主イエスの言葉です。み言葉は、命の糧であり、日々の歩みに生きる力を生み、知恵を与え、愛を満たしてくれます。これからも主の言葉に信頼し、聞き従いましょう。

結論

主が共におられ、私たちの生涯を祝福されることは、み言葉に従っていく時にいよいよ確かになっていきます。救いから信仰の成長に、そして主のもとに帰る時まで、み言葉に導かれて歩みましょう。

研究資料

（小平徳行）

本篇はヘブル語のアルファベットを並べた「いろは歌」の形式をとる。8節ずつを一つの段落として22の段落があり、各段落のそれぞれの節すべてが同じ文字で始められている。本テキストは「ヌン」。内容は、感謝、嘆き、賛美などが入り混じり、類型上は単純ではない。しかし中心主題は神の教え（〔ヘ〕トーラー）の有効性とその深遠な意義の探求であり「トーラー賛歌」と言われる。トーラーは本篇中に25回用いられている。「おきて」「教え」「律法」などの訳語が当てられ「モーセ五書」を指すこともある。元来「教える」「投げる」を意味する動詞〔ヘ〕ヤーラーに由来しており、その意味はかなり幅が広く、神の教えである聖書全体を意味していると考えてよい。

詩篇においてトーラーは完全なものであり、魂を生きかえらせるもの（19・7）、幾千の金銀貨幣にまさるもの（119・73）とされている。それに向き合う姿勢については、愛する（119・97）、忘れない（119・61）、それない（119・51）、心をつくして従う（119・34）、昼も夜も思う（1・2）、喜ぶ（119・70）などと表現されており、トーラーがいかに価値のあるものであり、真剣に向き合うべきものであるかを教えている。著者はかなり苦労した人物であり、神の教えを心から重んじる敬虔な信仰者である。

本篇にはトーラーの他にも神の言葉を意味する様々な用語が使われている。本段落でも「み言葉」「おきて」「さとし」「あかし」「定め」などが用いられているが、これらはトーラーの多面性を表していると考えてよい。

本段落は、悩みと迫害の中にあって（107、109、110）、み言葉による神の導きと救いを求める祈りと、どんな危機にもみ言葉を守る決意の表明がなされている。

テキスト

105 あなたのみ言葉は 最初を除くすべての段落にこの表現が含まれる。「言葉」と訳出される語句も一つでなく、代表的なものとして〔ヘ〕ダーバールと〔ヘ〕イムラーがある。前者は最も一般的な用語であって、陳述、約束、命令のいずれの形でも、神の真理を包含している。後者は「約束」と訳されることもある。本節ではダーバールが用いられている。神のみ言葉は、暗やみにおいて足もとを安全に照らす「ともしび」であると共に、進むべき道の方角を示す「光」でもある。

106 おきて（ヘ）ミシュパート　さばき、判決、判決の基準となる規則を表す。108節も。**守る**（ヘ）シャーマル　本篇では、ほとんどの段落で使われている。これは神の教えに喜んで従うことであり、戒めを守ることは、愛することと同義である（ヨハネ14・21〜23）。

107 み言葉に従って　詩人はみ言葉の真実さに期待して、自分自身が生かされることを求めている。み言葉（ダーバール）は、まれに「（神のなされる）事」（サムエル上12・16）「出来事」（創世記22・1、20）の意味で用いられる。神の言葉は実現して出来事となるものであり、天地創造をなし、救いのみわざを成し遂げる主体である。

108 供え物　「自発の供え物」と訳される言葉（レビ7・16）で、進んでささげるものを意味する。**さんびの**　直訳するならば「口の」となる。ここからこの供え物は、賛美、祈り、誓いを意味する（ヘブル13・15）。

109 わたしのいのちは常に危険にさらされています　直訳すると「わたしのいのちは、いつも私の手のうちにあります」となる。これは非常な危険にあることを言う慣用句である（ヨブ13・14）。隠して蓄えないで、手に携えて運ぶ宝は危険であることから、命が危険にさらされている、命がけでいなければならないという意味となったと考えられる。それと共に、自分の命を常に自分の手の中において、いつでも神にささげるという意味をくみ取ることもできる。このような覚悟で神の言葉（**おきて**（ヘ）トーラー）を忘れず、従い続けたいと決意している。

110　命が危険にさらされている理由。**さとし**（ヘ）ピックディーム　「任命する、命じる」を意味する（ヘ）パーカドから派生した語で、戒律、教え、委託事項、指令の意。

111 あかし（ヘ）エドゥース　証言、契約証書の意。出エジプト記ではこの語は十戒に用いられている。

112 定め（ヘ）ホク　（ヘ）ハーカク「刻み込む」から派生した語で、刻み込まれた文を意味する。したがって変更修正のない重要規定を表す。この語は過越しの祭りの制定時に用いられており（出エジプト12・24）、社会的な規定を表す。**心を傾け**（ヘ）ナーター　神に一途に向かう姿勢。

参考図書　1月19日分の他、榊原康夫「詩篇」『新聖書註解・旧約3』、石黒則年「新聖書講解・詩篇（73―150篇）」、鍋谷堯爾「詩篇を味わうⅢ」（以上いのちのことば社）。

9日　礼拝メッセージ例

聖　書　詩篇119・105〜112
タイトル　進もう！　み言葉に導かれて…！
暗唱聖句　あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です。　詩篇119・105
目　標　み言葉に導かれて歩みを進める者となる。

導入

（和田　治）

みんな、「カーナビ」って知ってますか？　車についている、とっても便利な機械です。どこに行きたいか、目的地をピッピッと入力すると、そこに着くまで、どこで曲がって、どの道を選んだらいいか教えてくれて、ちゃ〜んと導き続けてくれるんです。もちろん、間違った道に入っちゃっても、あきらめたりしないでそこからまた導いてくれるんです。「いいな〜。僕の毎日を、カーナビみたいに導いてくれるもの、無いかな？」実は、あるんです！　今日の暗唱聖句をもう一度声に出して言ってみよう！　そう、み言葉こそ、私たちを導いてくれる大切な、無くてはならない導き手なんですよ！

み言葉は足のともしび、道の光

みなさんは、真っ暗闇のトンネルの中を歩いたことがありますか？　今、ぐっと強く目を閉じて立ち上がってみましょう。そして、一歩前に踏み出してごらん。ほら、思ったより怖いでしょう？　光がない道を進むって、実はすごく難しいこと、そして危ないことなんです。足元が暗ければ、そこに何が落ちているかわかりません。ちょっとしたものにもすぐ躓（つまず）いてしまうのです。私たちの毎日の歩みでも、「どちらに進めばいいんだろう」と迷ったり、「しまった！」と思いもよらないことで躓くことがありますよね。でも、大丈夫！　み言葉は私たちの「足のともしび」です。「そっちは危ない！」「迷わず、こちらに進んでごらん！」って導いてくれるのです。

また、トンネルの出口に光が見えれば、「ああ、あそこに向かっていくんだな」って安心できるでしょう？　そのようにみ言葉は私たちの「道の光」です。進むべき方向を指し示して、ぶれたり迷い出たりしないように、そこまで導き続けてくれるのです。「何のために生きているんだろう」「これからどうなっていくのかな？」と不安な私たちも、み言葉に聞き従えば、絶対安心なんです！

み言葉に聞き従う幸せ

実は、イエス様も（旧約）聖書のみ言葉に聞き従って生涯を歩まれました。9月1日に「サタンよ、退け。『主なるあなた

の神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」っていうみ言葉を暗唱したのを覚えていますか？　荒野で悪魔がイエス様を、神様のみ心と違う方へ誘惑したとき、イエス様はみ言葉によって悪魔を退け、勝利されましたね。み言葉に聞き従うことを、イエス様は本当に大切になさり、またそのことを喜びとなさいました。命を懸けてみ言葉に聞き従われたのです。

そのイエス様が、ある時こうおっしゃいました。「わたしは世の光である。わたしに従ってくる者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつであろう」。そうなんです、私たちを照らし、導いて下さる光、それはイエス様ご自身なんですね！　イエス様と共に歩み、イエス様に従うことは、み言葉に聞き従うことなんです。私たちがみ言葉を大切にし、み言葉に聞き従うことを喜びとするなら、必ずイエス様に似る者へと成長していくのです。

心からみ言葉に従うために

「ああ～、でもイエス様に従うって、簡単じゃないよ。み言葉に聞き従いたいけど、自信ないな～」って思っていませんか。大丈夫です！　私たちにはみ言葉に聞き従う力はありません。でも、み言葉そのものに、それに従わせる力があるのです。イエス様が、私たちに力を与えて下さって、従えるように導かれるのです！

教会学校に元気に通っている4年生のみさきちゃん。6年生の近所の男の子からひどい意地悪をされて、いっぱい泣かされました。「赦せない～！」そんな時、「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」というみ言葉を学び、み言葉に聞き従いなさい、と心に迫りを感じました。みさきちゃんはこう祈りました。「神様、赦せません！　でも、敵を愛しなさいっていうみ言葉に従いたいです。赦せない私を助けて下さい！　赦せる力を下さい！」すると不思議なことに、その意地悪な子の寂しさや辛さ、ストレスやイライラを思いやる心がわいてきたのです。そして、心からその子を赦してあげることが出来たんです。

結び

み言葉は私たちの足のともしび、道の光です。だから、どんなみ言葉もしっかり心に蓄え、まっすぐな心で従いましょう。そうする力をイエス様からいただきながら！

♪あなたのみことば♪（ゴスペル・ミュージックベスト・ヒット集62、プレイズ&ワーシップ楽譜集Ⅰ他）

聖　書　マタイ16・13〜20
テーマ　キリストへの信仰告白

（金井信生）

序論

イエスが弟子たちに尋ねられた〈あなたがたはわたしをだれと言うか〉との問いかけに、ペテロが代表して〈あなたこそ、生ける神の子キリストです〉と答えました。この答えは主イエスを満足させる答えでした。ペテロの答えは、今も主イエスを信じ救いに入る信仰告白そのものであり、ここからクリスチャンの信仰の歩みが始まっていきます。

一、キリストに土台する

これまですでに、弟子たちは仕事も家族も捨ててイエスに従ってきました。イエスをキリスト（救い主）と信じていたからです。しかし、このペテロの答えは、ただイエスが救い主であるというだけでなく、〈生ける神〉すなわち天地創造のまことの神であると告白しています。人間の中から立ちあがっていく救世主ではなく、天からくだってこられたお方だと言い表しているのです。

ローマの支配下にあった当時、イエスを政治的な救世主と期待する人たちもいました。これは自分の願いに救世主をあてはめようとする、きわめて利己的な考えでした。しかし、クリスチャンであっても、同じ過ちを犯す危険はあります。

ペテロの言葉は事実の承認としての信仰告白です。イエスが神の子であり、私たちは人間に過ぎないことを認め、このお方の導かれるところ、命じられることに従うことを言い表わし、天からの命に生かされることを信じ受け入れる言葉です。

「信仰を告白する」といいますが、私たちが何かを見いだしたり、つかんだ結果ではなく、確かな土台、ゆるがない中心は、向こう側、すなわち神の側にあるのです。キリストが木であり、私たちは枝です。自分の立場や生き方を変えず信仰を飾りにする、というのではなく、私たちがキリストに接ぎ木されることです。そこに信仰告白から生まれる力があり、命があります。

飛行機が離陸するために必要な距離は、天候や機種など状況によって違いますが、飛び立つ瞬間があるはずです。信仰の生涯も、何となく聖書を学び、イエスをぼん

やりと神だと思っているところから、「イエスは私の救い主です。このお方に結びついて生きます」と決心し、告白してスタートすると、主の守りと導きが確かなものとなっていきます。

二、教会の交わりの中で

弟子たちが集まる中で〈あなたこそ、生ける神の子キリストです〉と告白することは、私たちの集まる中に、私たちとは違う方がおられるということです。同じ人間ならば、誰がいちばん偉いかと争うこともあるでしょうが、主を目の前にして、しかも主が誰よりも謙遜になってくださっている前で、もはや争うことはできません。

イエスはペテロの信仰告白に対して、〈わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう〉と答えられました。この〈岩〉（ペトラ）とは、ペテロが代表して言い表わした信仰告白です。個人的に主に申し上げるだけでなく、様々な違いを持つ人間が一つに集まって、同じ主を仰ぐ交わりの中で告白する現実の中に生きることです。

主が自分を愛し、赦し、受け入れてくださっているその恵みに感謝しながら、人をさばくことはできません。もしそんなことがあっても、主の御顔を仰ぐ時に、自分の心が砕かれていきます。

教会はただ人が寄り集まっているのではなく、キリストを中心として交わるために、召し集められているのです。すべての人のために来られたキリスト・イエスは、まず一握りの弟子たちを選び、教え導き、イエスを主と信じ告白する者の愛の交わりを広げていくように、身をもって教えられました。

「イエスは私の救い主です」という共通の土台に立つときに教会は揺るぎません。また〈天国のかぎ〉、すなわち天的な権威をもって、神のみ心を世にあらわしていきます。しかし、この信仰告白から逸れたり、交わりの中に隙ができると、黄泉の力が侵入してきます。

結論

同じキリストに接ぎ合わされて豊かに生かされている私たちです。これからもイエスによって共に生かされていることを感謝し、信仰告白そのものや、これに基づく賛美、また日々の交わりをもって、互いに主に結ばれた恵みを表わしていきましょう。

研究資料

（井上義実）

有名なペテロの信仰告白の箇所となる。ガリラヤや北方での伝道は間もなく終わり、十字架に向かってエルサレムに上られる時が近づく。その前に、イエスは弟子たちとの交わりを十分に持とうとされたのである。

テキスト

13 ピリポ・カイザリヤ 現在のシリヤのバニアスに当たる。ヘロデ大王が、アウグストゥスから割譲され整備し、息子のピリポが、皇帝に敬意を表してカイザリヤと改名した。地中海沿岸のカイザリヤと区別するため、ピリポの名を冠してピリポ・カイザリヤと呼ばれた。**人々は人の子をだれと言っているか** イエスとは誰か、イエスをどう捉えるかとの問いかけである。今日も、人々はイエスについて、それぞれに自分の考え、受け止め方を持っており、私たち全てへの根本的な問いかけと言える。

14 バプテスマのヨハネ…エリヤ…エレミヤ…預言者のひとり バプテスマのヨハネは、すでにヘロデの手で殺されている（14・1以下参照）。ヨハネの使信と生き様は、同時代の人々に鮮烈な印象を残した。エリヤは終末までに、再び現れるという預言が残されている（マラキ4・5）。エレミヤの再来は聖書には言及がないが、外典には触れられている。ユダヤ的伝統の中で、エレミヤという名が上がっている。預言者のひとりという認識は曖昧で、評価も前者より低いものである。

15 あなたがたはわたしをだれと言うか イエスの問いかけは他の人のことではなく、あなた自身はどうなのかと、個人に問いかけられている。

16 あなたこそ、生ける神の子キリストです 並行箇所となるマルコ（8・27～30）、ルカ（9・18～21）では、ペテロの信仰告白は、「キリスト」とのみ記されている。キリストには、メシヤとしての意味が込められている。生ける神の子という言葉には、イエスの神性が表されている。救い主の使命をこの世の圧政からの解放と見るか、永遠の救いをもたらす魂の救いと見るかには大きな違いがある。ペテロの告白は天につながるものである。

17 血肉ではなく 血肉（ギ）サルクス・カイ・ハイマ）血と（「と」は接続詞）肉という三語から成っている。神性と対比する人間性を表す言葉で、ヘブル的表現である。人間からではなく、聖霊によって、ペテロはイエスを神

の子と告白した。

18 あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう ペテロ（ギ）ペトロス）切り出された石。**岩**（ギ）ペトラ）石ではなく大きな岩の塊を表す。岩の上に教会を建てるとイエスは言われた。この岩とは何かということが歴史上問われてきた。主要な考え方として、岩とは、①ペテロ個人を指す。②ペテロの信仰告白を指す。③イエスの教えを指す（7・24）。④イエス自身を指す。と、四つの考え方がある。ローマカトリック教会は①ペテロ個人ととる。ペテロの監督権が教皇に継承されており、カトリック教会の権威を主張する。カルタゴの主教キプリアヌスによってカトリック統一論として体系化された。プロテスタント教会は②ペテロの信仰告白ととる。ペテロの信仰告白とする最も古い言及は、クリュソストムスに見られる。バークレーは、「岩はただ神のみであるが、教会はペテロと共に始まった。ペテロは教会の基礎と言えよう」と記す。**黄泉の力**（ギ）プライ・ハデュウ）新改訳「ハデスの門」が直訳である。黄泉と訳されたように死後の霊が存在する場所である。より懲罰的な意味合いではゲヘナ「地獄」が用いられる。教会は死と滅びに対して、勝利を持っていることが宣言されている。

19 天国のかぎを授けよう ペテロは聖霊が降ったペンテコステの日、エルサレムで復活のイエスを証しする説教を行った。三千人の者がイエスを信じ洗礼を受けた（使徒2章参照）。ペテロは、初代エルサレム教会の働きを進めた。さらにカイザリヤのローマの百卒長コルネリオの家では異邦人が救いを受けた（使徒10章参照）。ペテロが天国のかぎを用いることで、多くの神の業が進められていった。**地上でつなぐこと…地上で解くこと…** ユダヤ的な伝承において、律法の教師が用いる表現である。あることがらについて、つながれるということは禁じられることを意味する。解くということは許されていることを意味している。ペテロは、天的な権威をイエスからいただいた。ペテロが力を行使するのではない。ペテロが神の御心を地上に正しく示すことが目的である。

20 弟子たちを戒められた 厳格に命じられたという強い意味がある。イエスがキリストであることを証しする時がまだ来ていないゆえである。

参考図書 Leon Morris（Eerdmans）他

聖　書　マタイ16・13〜20
タイトル　イエス様ってどんな方？
暗唱聖句　あなたこそ、生ける神の子、キリストです。　マタイ16・16
目　標　イエス・キリストへの正しい信仰を告白する者となる。

導入

（飯田勝彦）

皆さんは、人の名前を覚えるのは得意ですか？

もし、皆さんが他の人から何回も名前を忘れられたり、間違えて呼ばれたりしたらどんな思いがするでしょうか？　学校の先生や親友、またはお父さんやお母さんのように親しい人から間違えられたらどうでしょう。何か悲しくなりませんか？　皆さんの名前だけではなく、皆さんのことを正しく知ってもらえないほど辛いことはないと思います。皆さんは、親しい人にちゃんと理解してもらっていますか。

他の人びとの意見

ある時、イエス様は弟子たちに「他の人は、わたしのことを誰（だれ）だと言っているか」と尋ねられたのです。イエス様は、ご自分がどのように人々から理解されているかをお知りになりたかったのです。すると弟子たちは「ある人たちは、イエス様のことを、荒野で洗礼をさずけていたヨハネだと言っています」と答えました。そして続けて「また他の人たちは、あなたをエレミヤだとか預言者のひとりだと言っています」と答えました。周りの人たちは、イエス様のことをそれぞれ自分たちの思いで理解していたのです。

今でも、「イエスなんて人が作った作り話だ」とか、「イエスは、歴史的には実際に存在した人かも知れないけど、神様なんかではない」、「イエスは、人を救うために努力はしたけど、失敗した人だ」という人までいるのです。このような答えは、イエス様を正しく理解する答えではありません。

ペテロの告白

イエス様は、弟子たちを通して他の人たちの意見を聞きました。その次に、弟子たちに直接「それでは、あなたがたはわたしをだれだと言うか」と尋ねられたのです。すると、弟子の一人であるペテロが、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」とハッキリと答えました。これ

は、「イエス様こそ、神様の約束なさった救い主です」と言うことです。これは、ペテロの意見というよりも、イエス様に対するペテロの信仰告白だったのです。

イエス様は、そのペテロの信仰告白を聞き「あなたはさいわいである」と言われました。イエス様は、ご自分がキリスト（救い主）と告白されて嬉しかったと思います。でも、「わたしを認めてくれて嬉しい」とは言われず、ペテロに「あなたはさいわいである」と言われたのです。

イエス様を正しく理解し、イエス様を自分の救い主として告白する人は、本当に幸せな人なのです。

あなたの告白は？

今朝、イエス様は弟子たちと同じように、皆さんにも「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」と質問されます。皆さんは、どのように答えますか？　今まで、教会学校に来てイエス様のことをたくさん聞いたかも知れません。では、そのイエス様は、皆さんにとってどんな方でしょうか。

イエス様は、作り話でしょうか。それとも、イエス様は、実際にはいたけど、ただのおじさんでしょうか。それとも、イエス様は皆さんを救うために来られた救い主でしょうか。心の中でよく考えてみてください。

皆さんの中でペテロさんのように「イエス様は、神の子キリストです。イエス様は、私の救い主です」と告白できる人は、神様の祝福をいっぱい受けることができます。また、イエス様を救い主と告白する人は、イエス様への「信仰」が与えられている人です。

神様は、皆さんがイエス様を救い主と告白して、幸せになって欲しいと願っておられます。そのために天の金庫に多くの祝福を備えてくださっておられます。イエス様への正しい信仰告白が、神様の祝福が詰まった金庫を開ける鍵となるのです。

まとめ

是非、イエス様を正しく知って、イエス様に正しい信仰告白をさせていただきましょう。そうすれば、救い主であるイエス様は、天から多くの祝福をもって皆さんを幸せにしてくださいます。最後に質問です。皆さんにとってイエス様は、どんな方ですか？

♪すくいの主イエスに♪（ホ95）

聖　書　マタイ16・21〜26
テーマ　十字架を負う生涯

（高橋頼男）

序論

十字架の死と復活を予告された後、イエスは弟子たちに言われました。〈だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、私に従ってきなさい〉。十字架を負う生涯とは、主イエスが歩まれ、そしてわたしたちが歩むべき道とは、どのような道でしょうか。

一、イエスが歩まれた道（21）

イエス様は、十字架に歩まれ、ご自分が受ける苦難の数々を具体的に弟子たちの前に示し、また、あからさまに語られました。そして後、〈だれでもわたしについてきたいと思うなら…〉と言われました。クリスチャン生涯は、「わたしに従ってきなさい」と言われる主に従い、主の歩まれた道（主の弟子としての道でもある）すなわち十字架の道を歩むことです。

そもそも、弟子（disciple）とは主の模範に習う者であり、その道において主の訓練（discipline）を受ける者です。私たちが、主の弟子、クリスチャンであろうとするなら、主に倣って自分を捨て、自分の十字架を負い、主に従うことの覚悟をしなければなりません。

しかし、それは、主が歩まれた道です。そこには、主が私のために歩まれた跡がくっきりと残っている道です。その道を、主の足跡を確かめつつ、私たちもまた、一足一足辿らせていただくのです。

二、神のみ心を優先させる道（24）

〈自分を捨て〉　主の道を歩むためには、自分の道（自己追求の道）を歩むことはできません。主の道と自分の道は、決して交わることがありません。主の道を歩もうとするなら、まず、自分の道を行くことを断念すること、すなわち、自分を捨てる覚悟が必要です。私たちの前には、しばしば主の道を選ぶか自分の道を行くか、二つの選択があります。そこにおいて、主の道、み心の道を選び取ることができるなら本当に幸いです。

主イエスのゲッセマネにおける祈りは、私たちの大切な模範です。主は、ゲッセマネにおいて自分の願いを言い表わしつつ、父のみ心を求めて切に祈られました。ご自分の願いと、父のみ心との狭間で長い苦闘の祈りをな

された後、十字架にかかることこそが父のみ心であることを確信された主は、ついに十字架の道を選びとられました（マタイ26・36～46）。

時に、私たちも主のみ心を求めつつ、苦しい祈りをすることがあるでしょう。それは、決してたやすい祈りではありません。しかし、主が助け、聖霊が励まして祈らせてくださいます。信じ、従って、み心を選び取った時、勝利と確信がきます。

「彼は御子であられたにもかかわらず、さまざまの苦しみによって従順を学び」（ヘブル５・８）とあります。私たちは、とりわけ苦難の中で、祈りを通してキリストに従うこと、すなわち、苦難の中でキリストの従順を学ぶべきです。その時、本当の意味で、主の信仰と服従を身につけるのです。

三、神が各人に備えてくださった道（24）

〈自分の十字架を負うて〉　主の道は、十字架を負う道です。キリストが私たちのために十字架を担われたように、今度は、私たちがキリストの十字架を担うべきです。もちろん、主が負われた十字架そのものを、私たちが負うことではありません。また、そのようなことはできません。私たちが負う十字架とは、キリストを信じ、キリストに従って生きる時、主がそこに備えられたキリストのための苦しみをしっかり受け留め、担うことなのです。しかも、恵みの賜物として負うことです（コロサイ１・29）。

主は、わたしたちのことを良く御存じで、それぞれにふさわしい十字架を備えられ、それを負って私に従ってくるようにと導いてくださいます。私たちは、主が負わせてくださる十字架を避ける事もできますが、避けないで逃げないで、しっかりと担いましょう。今日、主が、負わせられる私の十字架はいったい何でしょうか。

結論

十字架は確かに、苦しい道、困難な道ですが、主が共におられる道であり、主の助けがあり、必ず主の復活に続く道であることを覚えましょう。そして、主が前におかれた希望をもって御苦難を忍ばれたように、十字架の道にある希望を忘れないようにしましょう。

「No Cross No Crown」（十字架無くば冠なし）。自分に与えられた十字架を負って、喜んで主にお従いする者とならせていただきましょう。

研究資料

（中島啓一）

イエスは弟子たちに、ご自身が救い主としてどのような道を歩まれるかを、このとき初めて示された。それは彼らの（誤った）期待を裏切る、十字架の苦難と死という道であった。その道を弟子たちもまた歩まねばならない。弟子とは、師の模範にならうべき者だからである。私たちも、キリスト者であろうとするならば、自分を捨て、自分の十字架を負うことによって、イエスに従っていくのだという決意を表明せねばならないのである。

テキスト

21 この時から イエスが公の宣教を始めた時（4・17）と同じ表現。ここが福音書の中での大きな転換点であり、ここからイエスの死に焦点が合わせられた第二のステージが始まることを示す。**自分が必ず** これから告げられることは、弟子たちにはあり得ないことのように思えるが、それらは神の意志による必然以外の何物でもないことを示す。**エルサレムに行き** そこは聖なる都であると共に、預言者の殉教と深い関わりのある地であった（23・37、ルカ13・33等）。**殺され** 直前の箇所での告白（16・16）でペテロが心に思い浮かべていたこととは全く正反対のことである。**三日目**に 「三日」は12・40ではヨナのしるしとの関連で、また26・61他では神殿の破壊と再建の暗喩（あんゆ）で登場する数字。旧約ではホセア6・2に「三日目に」という表現がある。**よみがえる** 主の復活は28・1他で成就し、初代教会の信仰告白の中心要素となる（Ⅰコリント15・4、使徒2・23～24他）。

22 イエスをわきへ引き寄せて、いさめはじめ 古代の師弟関係において、弟子がその師を（特に公の場で）批判することは、最もしてはならないことの一つであった。ペテロはそのルールを破ったのである。イエスの示した真のメシヤ像は、ペテロの胸中にあったメシヤ像とは全く相容れないものであった。ペテロに限らず、当時のユダヤ社会の人々が思い描いていたのは、民族を抑圧から解放する「勝利に満ちたメシヤ」だったのである。**とんでもないことです** 直訳は「あなたに（神の）慈悲が（あるように）」で、文脈上「神がそんなことが起こるのをお許しにならないように」の意になる。**そんなことがあるはずはございません** 二重の打消を用いた強い否定表現は、彼のメシヤ理解が間違ったものであったことを暴露する。

23 サタンよ、引きさがれ 意図せずとはいえ、主の十字架の道を否定し神の意志に背いたペテロを、イエスは荒野での誘惑者に対するのと同じように糾弾した（4・10）。**わたしの邪魔をする者** 「岩」（18）であるペテロは「つまずきの岩」（イザヤ8・14）になってしまった。

24 だれでも 直接には弟子たちに語りつつ、全ての人（後世の教会を含む）にも向けられている。**自分を捨て、自分の十字架を負うて** 次節の「わたしのために自分の命を失う者」と合わせ、「イエスとその福音を証しするために、死さえも恐れずに、命をかけてイエスに従う生涯を全うすること」と理解すればよいだろう。「捨て」、「負うて」が不定過去形（アオリスト）であるのに対し、**従ってきなさい** は現在形。それは、従うということが一回限りのことではなく、継続的な事柄であることを意味する。

25 自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだす ここには逆説的な原理がある。「失う」、「見いだす」は未来形で、終末的な審判を示唆する。「命」（ギ）プシュケー）は、単なる肉体の命ではなく、より深くより根源的な意味での人間の真の存在の意。「命を見いだす」ことは「救い」と同義と見て良いだろう。利己的に自分の存在を守ろうとする人は、イエスの弟子としての本当の献身のあり方を知ることができず、最後には皮肉にも、自分が守ろうと躍起になってきたものを失って終わる。一方、真の弟子は、なくてならないただ一つのものと、他のものとを並べることをしない。そして、キリストに従うことを貫き通すときに、すべてにまさる栄光の富を受けるのである。

26 人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか 4・1～11の荒野での誘惑を彷彿（ほうふつ）させる表現。サタンはイエスにこの世界の栄華を見せて誘惑した。富の誘惑は道をそれさせる強い力である（6・19～21）。**人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか** 「自分の力で買い戻すことは絶対にできない」という意の反語表現。その命を与えるための価は、罪なき神の御子にしか払えなかったのである。私たちは、ただ流された血潮の尊さを思い恵みに感謝して、喜んで自分の十字架を負いつつ、イエスに従っていこう。

参考図書 注解書 増田誉雄（新聖書注解）、D.H. Hagner (Word). D. Hill (New Century Bible). その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

聖　書　マタイ16・21〜26
タイトル　主に従おう！　十字架を負って…
暗唱聖句　だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。マタイ16・24
目　標　十字架を負いつつ、キリストに従う者となる。

導入

（和田　治）

先週は、ペテロがイエス様に言った、「あなたこそ、生ける神の子キリストです」というみ言葉を学びましたね。イエス様がどなたであるかをどんぴしゃり、正しく言い当てた、百点満点の答えでした！　なのに、あれれ〜？　そのあとペテロはイエス様から、「私の邪魔をするな！」ときつく叱（しか）られます。いったいどうしたのでしょうか。

イエス様が殺されちゃう？

「よく聞きなさい。わたしはこれからエルサレムに行く。そこで、ユダヤ人の指導者たちの手でひどく苦しめられるのだ。それだけじゃない、わたしは彼らに殺される。そして三日目に復活するのだよ」。イエス様はこれから起こる十字架と復活について、初めて弟子たちにはっきり話されたのです。「ええ？　冗談じゃないよ…。イエス様は待ちに待った救い主だ。私たちの国を悪いやつらから救ってくれるんだ。そのはずなのに、殺されちゃうなんて…」。そう思ったペテロは、イエス様を脇へ引き寄せました。「ちょっとイエス様、何をおっしゃるんですか！　とんでもございません。そんなことが起こってたまるもんですか…」。

十字架を背負ってついてきなさい

「サタンよ、引きさがれ！」びっくりするようなイエス様のお声！　どうして？　それは、ペテロがイエス様の十字架への道を「とんでもない！」って打ち消そうとしたからです。それは、イエス様の邪魔をすることでした。十字架で殺されること、それは、どんなに辛く苦しくても、イエス様が通らなければならない道でした。神様が備えられた道だからです、私たちの救いのために！

そしてイエス様はおっしゃったのです。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」。イエス様が私たちのために十字架にかかってくださった、その愛の大きさは、はかり知ることができません。そのイエス様の十字

架の愛を思い、今度は、私たちが十字架を負うのです。そうです、私たち一人ひとりにも、神様はすでに、十字架を負って歩むべき道を備えておられるのです。

では、自分の十字架を負ってイエス様について行くって、どういうことでしょうか。それは、イエス様を信じているために受けねばならない苦しみをしっかり受け止め、その苦しみの中でもイエス様に従い続けることです。

あなたは教会学校に来ているということで嫌なことを言われたり、仲間外れにされて、悲しい思いをしたことがありますか？　イエス様を信じていることで馬鹿にされたことがありますか？　それでもイエス様を信じ続けるとき、それはあなたの十字架を負うことになるのです。

十字架を負った少女

今から60年近く前、朝鮮戦争の時に、韓国のキリスト教会で本当にあったことをお話しします。北朝鮮の軍隊が日曜日の礼拝中の教会を襲いました。北朝鮮軍の隊長が、その教会の壁にあったイエス様のお顔の絵を床に置きました。そしてこう言ったのです。「一人ずつ前に出てこの絵を踏みつけろ。踏んだ者は右に、踏まない者は左に分かれよ。左に進んだ者はこの場で射ち殺す！」何という恐ろしいことでしょう！　みんなの顔は恐怖でひきつっています…。まず、教会の役員さんが前に出てきて、なんとその絵を踏み付けました。次に、やはり教会の中で大切な立場にあった人が出て来て、イエス様のお顔の絵を踏み付けたのです。次々に、信徒が絵を踏んでいきました。やがて一人の少女の順番になったのです。彼女は、泥まみれのイエス様のお顔の絵を手に取り、ハンカチで汚れをきれいに拭き取り、「私は、主イエス様のために死ぬ用意ができています」と言って、左側に行きました。殺されることも覚悟していたその少女に対し、隊長は「私がクリスチャンなら、同じようにしたでしょう」と少女に言い、彼女を殺すことはしませんでした。少女はイエス様のためにならどんな苦しみも背負おうと心に決めていました。自分の十字架を負って従ったのですね。

結び

自分の十字架を負ってイエス様に従うことは、私たち自身の力では決してできません。でも、共にいてくださるイエス様がそうさせてくださいます！　だから、私たちも主に従いましょう！　十字架を負って…。

♪主の手足になろう♪（ホ86、イン92）

聖　書　マタイ17・1〜8
テーマ　キリストを見、キリストに聞く

（石田高保）

序論

よく知らなければその人のことを信用することはできない。聖書はキリストをあらゆる角度から照明を当て、安心して人生を主に任せられるようにしている。

一、キリストを知る

イエス様は当時の弟子たちにとってはどういうお方だっただろうか。ペテロは「あなたこそ生ける神の子キリストです」（16・16）と言い表している。つまりこの私を救って下さるまことの神ですと。どのように救って下さるのか。自分から進んで十字架にかかり、死ぬことによって、私たちの罪を贖って下さった。まったく罪も汚れもない人となられた神だからこそ、私たちの罪を取り除くことができる。ではあなたにとってイエス様とはどういうお方だろうか。

イエス様はペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを連れて高い山に登った。〈彼らの目の前でイエスの姿が変わり〉、弟子たちは三年半、主と一緒に生活してきたが、今までにない姿に変貌するのを見て、腰を抜かした。これは明らかにイエス様が普通の人間ではない事をあらわしている。主が人間として生まれてきたことは間違いない。しかしその生まれ方は普通ではなく、父親の介在がなく、聖霊によって生まれた。これは神が人間となるために、計画された独創的な方法。生まれてからは普通の人間として生きたが、30才より神の国を宣べ伝えるようになってからは、著しい奇跡によってご自分が神であることを表した。しかし今日の出来事のように、姿を変えるという形で表したことはなかった。なぜ主は神々しく変貌した姿を弟子たちに見せたのか。ご自分が間違いなく神の子であることを明らかにするためであった。

二、キリストを見る

これを見た弟子たちの生涯にどのような影響が及んだか。終生忘れえぬ経験となり、弟子たちの信仰を強めた。「わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだから…わたしたちもイエスと共に聖なる山にいて、天から出たこの声を聞いた」（Ⅱペテロ1・16〜18）、ペテロはイエス様の変貌する姿をこの目で見たけれども、私たちも聖書を読んだり、メッセージを聞いたり、みことばを分かち合ったりするとき、神の言葉を聞き、主の姿を信仰の目で見ることができ

る。私たちが栄光のイエス様を見るとは、突き詰めれば主をいつも目の前に置くこと。それは心をかき乱す思いや出来事に目を奪われるのではなく、〈イエスのほかには、誰も見えなかった〉というように、主を目の前に置くことである。ペテロが訳の分からないことを言い出した時、天から声がして〈これに聞け〉と言われた。損得勘定で頭がいっぱいになってしまったとき、祈りをもって主に尋ねること。み言葉そのものと聖書の価値観で物事を判断し、従ってゆくこと。「わたしたちは見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ」、私たちはこの世と神の国と両方に足を置いている。この世に生きながら、神の国に生きている。どちらが確かであるか。言うまでもなく目に見えない神の国のほうである。目に見えるこの世界は、何の努力をしなくても見ることができる。しかし目に見えない神の国は、意識的に目を注ぐという努力が要る。栄光に輝くイエス様を見るとは、何か神秘的な体験というのではなく、主を目の前に置き続けるという営み。ふと気がつけばイエス様と会話している自分を発見する、そういう世界。

モーセとエリヤはどんなことを語り合っていたのかというと、ルカ9・31「イエスがエルサレムで遂げようとする最後のことについて」、つまり十字架の死である。モーセは律法の代表、エリヤは預言の代表、つまり旧約聖書全体は人類の救いを完成するキリストの死に集中している。モーセとエリヤはイエスに語ったかもしれない。主よ、神の子であるあなたのほかに十字架にかかって救いの道を開くことのできる方はいない、と。

結論

〈これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である〉、この言葉は、主が間違いなく神の子であることにお墨付きを与えている。第一義的には、イエス様にかけられたお言葉である。しかし第二義的には、私たちに語りかけられていることと受け取ってよい。自分はとても神の心にかなうような人間ではないと言いたいだろう。イエス様のような完全、完璧を基準にしたら、誰もそのようにはいかない。けれどもキリストの血潮のゆえに、罪ゆるされ、神と和解し、神の子とされた人は、神の目には愛する子であり、その存在が無条件に受け入れられている。このみ言葉を自分にも語り掛けられていることを自覚し、愛されて生きようではないか。

研究資料

（宮澤清志）

先々週より「キリストの十字架への道」という単元にはいっている。その中で、特にマタイの記事を中心に「イエスに対する告白」と「受難の予告」「弟子の歩み」といった記事を見てきた。それらの箇所を受けて、今日は「山上での変貌（変貌山）」の記事について見る。この記事は、マルコ9・2〜8、ルカ9・28〜36にも登場する。それらの記事で共通することは、変貌山の出来事に先立って、必ずイエスへの信仰告白と受難予告、そして弟子としての歩みという記事が登場するということである。

テキスト

1　六日ののち　珍しく明確な数値である。このことは、前述したとおり、前の箇所（ペテロの信仰告白ほか）との関連性の深いことを強調するものと考えられる。**ペテロ、ヤコブ、ヤコブの兄弟ヨハネだけを連れて**　「だけ」とは直訳すると「ご自分のものに従って」となる。これは、この三人がイエスの側近の者であったことを暗示する。この三人はこの箇所の他にも「ヤイロの娘のよみがえり」（マルコ5・37）、そして「ゲツセマネの祈り」（マタイ26・37）においても立ち会うことがゆるされた。**2　姿が変り**（ギ）メタモルフォー　着替えることに表される、表面的な変化ではなく、根本的な変化を指す。あのグロテスクな蛹（さなぎ）が羽化して美しい蝶へと変化するような変化を指す。**輝き**　この変化の神々しさを語る。**白く**　この輝きが天的なものであることを語る。**3　モーセとエリヤ**　この二人については様々に理解されている。モーセは神から律法を付与された「律法」の代表者であり、エリヤは「預言者」の代表である。しかも彼らは山において神と直接語った経験があり（出エジプト31・18、列王上19・9〜12）、彼らは二人とも当時の人々からは死んでいないと思われ（列王下2・11参照。またモーセについてもユダヤの伝承では死ななかったとされている）、そして何よりメシヤの時代にはこの二人は戻ってくると信じられていた。**語り合っていた**　ただ単に話しをするだけではなく「会談する」「協議する」という意味がある。この三人は何を「会談」していたのか。ルカは「イエスがエルサレムで遂げようとする最後のこと（9・31）」と語る。この「最後のこと」（ギ）エクソドス）が出エジプトをも意味する言葉である事は、この後

起こるエルサレムでの出来事（十字架と復活）が、出エジプトの出来事の踏み直しであることを示唆する。

4 マルコはこのペテロの言葉に関して、彼らの恐れのゆえに何を語ったらよいかわからずにこの言葉を発した、と解説する（9・6）。なお、ペテロのこの言葉の真意は定かではないが、当時、古代中近東の世界では、大切な客には敬意を払ってテントを立てる習慣があった。ペテロはイエス・モーセ・エリヤの三人に対する敬意から、咄嗟（とっさ）にこの言葉が出たのではないか、と推測できる。

5 輝く雲 雲は、旧約聖書においては神の臨在のしるしとして登場する（出エジプト24・15〜18、40・34〜38）。マタイはこの雲に「輝く」を付け加え、この雲が神の目に見える栄光の輝きであることを強調する。**これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である** 詩篇2・7とイザヤ42・1からの引用である。子とは、いわゆる血縁関係という意味ではなく、父なる神との関係において父なる神から遣わされ、なすべき働きへと任じられたという意味である。ちなみに詩篇2・7は、イスラエルの歴史において、王の即位式において歌われた詩であり、イエスが王の王、メシヤであることの父なる神の宣言であるといえる。一方イザヤ42・1は、メシヤはしもべであることを意味する。本節に表されるメシヤは、王であり、かつしもべでもあるのである。なお、この言葉はイエスのバプテスマに際しても語られており（3・17）、イエスの王としての就任式に語られた言葉が再び受難を前にして繰り返されたことになる。そして、このイエスの言葉に聞くようにと神は語られるのである。

6 三人の弟子たちの、この神のみ声を聞いた反応が示されている。**顔を地に伏せた** とは、直訳では「彼らの顔の上に倒れた」となり、ひれ伏して顔を上げられない状態を指す。このような、神の聖なる臨在に触れ、圧倒される体験は、聖書中様々な箇所にみられる（イザヤ6・5、エゼキエル1・18〜2・1、ダニエル8・17など）。この恐れこそ、礼拝における鍵であり、神の臨在と神の御声のあるところには必ず生じるものである。

7〜8 イエスは近づいてきて ここでのイエスは弟子たちが見慣れたイエスであった。**イエスのほかにはだれも見えなかった** ここに、律法の終わりと預言者の成就がキリストによってもたらされたと見る者もいる。

参考図書 中澤啓介「マタイの福音書註解」他

2日　礼拝メッセージ例

聖　書　マタイ17・1〜8
タイトル　雲の中から響いた神の声
暗唱聖句　これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け。
マタイ17・5
目　標　キリストに目を留め、キリストに聞き従う者となる。

導入

（松浦みち子）

皆さんの中で、チョウチョの幼虫を飼った人はいますか？　毛虫は気持ち悪く、みんなに嫌われますね。しかし、幼虫がさなぎになり、ある日、その中からチョウチョがゆっくりゆっくり出てきて、羽を広げ羽ばたくのを見たら、その美しい姿に驚き、言葉がでないほど感動しますよ。今日は、イエス様がいつもとは違う姿に変わられたお話をしましょう。

光り輝くイエス

ある日、イエス様は弟子たちのうちペテロ、ヤコブ、ヨハネ三人を誘って「一緒に山に登ろう」と声をかけ、高い山に登って行かれました。「よいしょ、よいしょ」、頂上はまだまだです。「もう少しだよ、頑張って！」ついに頂上にたどり着きました。すると突然、ペテロたちが見ている前で、みるみるうちに、イエス様の姿が変わったのです。わぁー、驚きのあまり言葉も出ません。その顔はまるで太陽のように明るく輝き、着ていた服はまるで光のように真っ白になりました。まぶしくて見てられないほどです。でも、よく見ていると、光の中で、イエス様のそばに二人の人がいて何か話をしています。目を凝らすと、一人はずっと昔にイスラエルの人たちをエジプトから連れ出したモーセです。もう一人は、神様の事をみんなに伝えた預言者エリヤです。この三人は、イエス様のエルサレムでの最後の十字架のことについて話していたのです。その光景を見てペテロは息もできないほどびっくりして言いました。「イエス様、わたしたちがここにいるのは素晴らしいことです。もし、よかったら私はここに家を三つ建てましょう。一つはイエス様のために、一つはモーセのために、一つはエリヤのために」。ペテロはもう自分が何を言っているのかわからないほどの驚きようです。

天から響いた声

ペテロが話しているうちに、光り輝く雲がモクモクとあ

らわれ、イエス様たち三人を包みました。そして雲の中から神様の声が聞こえてきました。「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け」。弟子たちは神様の声を聞くとびっくりして恐ろしくなり、地面に頭をすりつけてひれ伏し、ブルブル震えていました。すると、イエス様がペテロたちに近づいてきてトントンと優しく肩に手を置きおっしゃいました。「起きなさい。恐れることはない」。彼らは恐る恐る顔を上げてみるとイエス様だけがおられました。山から下って来るとき、イエス様は弟子たちに「今見たことを、わたしが十字架にかかってよみがえるまでは、だれにも話してはいけません」とおっしゃいました。イエス様は三人の弟子たちだけにご自分の本当の姿を見せて下さったのですね。

イエス様だけを見る

イエス様が洗礼を受けられたときも天から声があったことを知っていますか？　バプテスマのヨハネから洗礼を受けられたとき天から声がありました。「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」（マタイ3・17）。イエス様が神様の子であることがはっきりと示されたのですね。今日、学んでいる個所では、同じ天からの声ですが、「これに聞け」という言葉が付け加えられていることに目を留めましょう。このことは何を意味するのでしょうか？　ペテロはイエス様のすばらしい姿を見た時、何を言っていいのかわからなくて、「イエス様、ここに家を三つ建てましょう」と、とっさに言いましたが、わたしたちがイエス様のために何かをするということではなく、イエス様に聞く、従うことの大切さを忘れてはなりません。ペテロは後の日に手紙を書き残しました。ペテロの第二の手紙では、「自分たちがみんなに語っていることは、作り話ではなく実際に体験したことなのだ。『これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である』という天からの声を聞いたのだ」と証ししています。そして、素晴らしい体験よりも、預言の言葉である聖書が確かなものであることを教えています。

わたしたちの目にいろいろのものが見えます。それらに心が奪われてイエス様以外のものに夢中になってしまうことがあります。「イエスのほかには、だれも見えなかった」とあるように、イエス様から目を離さないように、イエス様の言葉に耳を傾け、従って歩みましょう。

♪しゅにしたがいゆくは♪（こ53、こ改119、ホ87他）

聖　書　ヨハネ12・20〜28
テーマ　一粒の麦として

（石田高保）

序論

戦後の日本は国民が一丸となって経済を成長させるという使命に生きてきたが、これも今や過去のものとなり、他の使命を求めてさまよっている。いったい時代に翻弄されない使命はないものだろうか。使命は英語でミッションと言う。任務とか、伝道という意味もある。ではあなたのミッションは何だろうか。

一、イエス様の使命

しゅろは旧約聖書では「なつめやし」と訳される常緑樹で、繁栄の象徴とされていた（詩篇92・12）。ヨハネは、黙示録7・9で、しゅろの枝を持った群衆が神を賛美している姿を描いている。今日の個所でも群衆、おそらくガリラヤから過越祭に来ていた巡礼者たちは、詩篇118・25、26を引用し「ホサナ、主の御名によってきたる者に祝福あれ」と叫んでいる。ちなみにホサナは「お救いください」という意味のヘブル語である。主のガリラヤでの活躍を知っていた人々や、ラザロの復活を見聞していた人々は（17、18）、主が世俗的な意味の王となり、奇跡的な力をふるってローマの支配から民族を解放してくれることを期待していた。しかし、その後の言動からわかるように、主はその期待に応えようとはしなかった。かえって主はそれと正反対のことを考えておられたのだ。

戦争に勝利した王は普通、馬に乗って凱旋するのだが、主は〈ろばの子を見つけて、その上に乗られた〉。ろばは、馬よりもはるかに小さく、力も見栄えもない。ろばの子ならなおさらだ。ゼカリヤは救い主の使命を知った上で「見よ、あなたの王がろばの子に乗っておいでになる」と預言した（ゼカリヤ9・9）。それに続けて、「わたしは…エルサレムから軍馬を断つ。…彼は国々の民に平和を告げ」（同9・10）と記している。エルサレム入城の時、イエス様を政治的な王と考えていたのは、群衆だけではなく、弟子たちも同じだった。しかし、「イエスが栄光を受けられた時」（16）、つまり、十字架、復活、昇天の後に、弟子たちはゼカリヤがイエス様について預言していたことに気がついたのである。主の使命が、政治的な解放ではなく、罪からの解放であったことは、その後の主の姿を見ればよく理解できる。

二、主の弟子の使命

主に敵対していたパリサイ人が「世をあげて彼の後を追って行った」（19）とため息をつくほど、イエス様の人気は高まっていた。さらに巡礼に来ていたギリシャ人たち、割礼は受けていないが、イスラエルの神を信じていた人々も〈イエスにお目にかかりたい〉と訪ねてきたのである。しかし今や主の覚悟されていた「時」が来た（2・4、7・6参照）。十字架において、ユダヤ人だけでなく、ギリシャ人をはじめ全人類の罪の身代わりになるという、神の時が来たのである。それは主が一粒の麦になることによって、初めて実現することにほかならない。神であるキリスト（一粒の麦）は、人となってこの地上に来られた（地に落ちた）。さらに十字架で死なれるとき、豊かに実を結ぶ（全人類の救いとなる）。これは、二千年前、文字どおりに実現した。しかし、この真理は、単にイエス様の場合だけではない。〈自分の命を愛するものはそれを失い、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至るであろう〉、主に従う者たちも〈この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至る〉のである。この場合、憎むとは「第一としない」という意味である。自分ばかりを大切にする生き方をやめるということ。一粒の麦が死ぬとは、麦としての形を失うことを意味する。しかし、形は失われても、何十倍もの収穫となって実を結び、命は次の世代に受け継がれる。

結論

しゅろの枝になって、主を賛美することは素晴らしいことだ。ろばの子のように主のご用に用いられることも幸いである。しかしもっと大切なのは、一粒の麦になって死ぬことである。私たちも自分ばかりを大切にする生き方をやめ、周りの人のために自分を使う生き方にチャレンジするとき、豊かに実を結ぶことができるのだ。具体的には身の周りの小さな十字架を選び取ることである。たとえば損得を越えて人を助けることであり、好き嫌いを越えて親切にすることであり、遺恨を越えて人を赦（ゆる）すことであり、煩わしさを越えて人の話に耳を傾けることなどである。そのように一粒の麦となって死ぬとき、神が力強く働いてくださる。〈さらにそれをあらわす〉たとい損になることでも、そのような生き方を選ぶことがキリストの弟子の使命である。さて、主から示されているあなたの使命、ミッションは何だろうか。

研究資料

（宮澤清志）

テキスト

20 ギリシャ人 この言葉をもって、必ずしも人種としてのギリシャ人を意味するわけではない。この言葉にはいくつかの意味があるが、ユダヤ教に改宗した異教徒であったか、あるいはユダヤ教に理解を持つ「神を恐れる異邦人」（使徒8・27）かのいずれかであったものと推測される。いずれにしても、ヨハネがこの表現をここに示したのは、イエスの御わざが、同胞イスラエルから異邦人に移ることの序曲であり、その意味で新しい時の始まりを告げる注目すべき出来事なのである。

21 彼らはガリラヤのベツサイダ出であるピリポのところにきて このギリシャ人たちがなぜ直接イエスのもとにではなくピリポの所に来たのか、はっきりした理由はわからないが、ピリポとアンデレの名が記されていることを考えると、この二人がギリシャ的な名前の持ち主であって、またギリシャ人と何らかのつながりがあったのではないかと推測できる。あるいは、次の節も含めて理解すると、イエスの福音がその弟子たちを経由してはじめて彼らに届いたのであり、この事はイエスの深い必然であったと理解する学者もいる。含蓄のある黙想である。**君よ**（ギ）キュリエ） 通常「主」と訳される言葉である。この言葉を用いることによって、主と使徒たちに対する尊敬の思いを表したものであろう。**イエスにお目にかかりたいのですが** ある英訳聖書では、「イエスにお目にかかれるとよいのですが」と、日本語訳より少し弱く訳されている。しかし、なぜ彼らがイエスにお目にかかりたいのか、その動機は定かではない。単なる好奇心からであったかもしれない（ルカ19章のザアカイ他）。

23 人の子が栄光を受ける時がきた この文の中心は「時がきた」である（ギリシャ語の語順ではこの言葉が最初にある）。ヨハネはこれまで繰り返し「わたしの時はまだきていません」と語ってきた（2・4、7・6、8・20）。しかしやがてその「時」がくることを、慎重に語ってきた。そして時いたって「人の子が栄光を受ける時がきた」と語る。それはイエスの十字架の時であり、完成の時である。この宣言を聞いて、群衆たちは、いよいよローマの支配を打ち破り、イスラエルの王国を樹立する栄光の時の到来を夢見たに違いない。

24　よくよくあなたがたに言っておく　イエスが非常に重要な真理を語る時にしばしば用いる表現。**一粒の麦が地に落ちて死ななければ…**　よく知られた自然の事例をもって、真理を説明する。キリストの十字架の死は、この世に命をもたらすものである。イエスにおける栄光の時とは、自らが栄光を受ける時ではなく、人々の栄光のために自らを十字架にささげる贖いの死の時であった。

25　この逆説の言葉もしばしば福音書において語られてきた（マタイ10・39、16・25、マルコ8・35、ルカ9・24、17・33）。**自分の命**　ここの「命」（ギ）プシュケーは肉的生命であり、この命によってのみ生きようとする者は、**永遠の命**　を失うのである。こちらの「命」（ギ）ゾーエー）は、神の国の生命、霊的生命である。

27　この節は、ヨハネのゲツセマネとも呼ばれている箇所である。**心**（ギ）プシュケー）　25節の「命」と同じ言葉である。あるがままとしての人間の心は、死を前にして悩みを禁じることはできず、動揺せざるを得ない。ゲツセマネにおける「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである」（マタイ26・38）という言葉と同じである。それは肉体的な死の恐怖でなく、罪と死の重荷を一身に背負った暗黒の世界がイエスの心を支配しているのである。**父よ、この時からわたしをお救い下さい**　人間イエスの叫びであり、ゲツセマネにおける「この杯をわたしから取りのけてください」（マルコ14・36）の意味を持つ言葉である。**しかし、わたしはこのために、この時に至ったのです**　イエスはただ十字架の一点を見つめていた。

28　父よ、み名があがめられますように　この祈りこそがイエスの祈りの根源であり、私たちの祈りのはじめでなければならない。**天から声があった**　福音書は、三度、天からの声を記述している。イエスのバプテスマ（マルコ1・11他）と変貌山（マルコ9・7他）とこの箇所である。いずれもイエスの生涯においては転機的な出来事といえよう。そしてヨハネはこの出来事をイエスの転機的な出来事と見たのである。**わたしはすでに栄光をあらわした。そして、更にそれをあらわすであろう**　イエスの十字架への道が、神の定められた道であり、神のみこころにかなう道であることを表している。

参考図書　A. T. Robertson「Word Pictures in the New Testament」（Broadman）、ビ・エフ・バックストン「ヨハネ傳講義」（バックストン記念霊交会）他

聖　書　ヨハネ12・20〜28
タイトル　一粒の麦となられたイエス様
暗唱聖句　一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶ。
ヨハネ12・24
目　標　一粒の麦として死んでくださったキリストによる救いを受け取る。

（松浦みち子）

導入

一粒の麦の種から何粒くらいの麦が収穫できるでしょうか？　ある新聞記事で一粒の米から三九八粒もの実ができた記事がありました。すごい数ですね。じゃがいも一個の種芋からたくさんのいもが育ってきます。でももともとの種や種芋はどうなるのでしょう。腐って跡形もなくなってしまいます。死ぬことなしに新しい命が生きることはないのですね。

時が来た？

イエス様は過越の祭りの数日前に「時が来た」と謎めいた事をおっしゃいました。何の時が来たのでしょう。ちょうどエルサレムの町は各地から大勢の人が集まってにぎわっていました。そのうちのギリシャ人の数名がイエス様に面会を申し込んできたのです。それまで、イエス様はユダヤ人に伝道してこられましたが、ユダヤ人以外の人がイエス様に会いたいといって来たことを心に留められ、そして言われたのです。「人の子が栄光を受ける時がきた」。これはイエス様がすべての人の救い主として十字架で死ぬ時がいよいよ来たということをあらわしています。当時の人々は、イエス様がイスラエル王国を再び建て上げてくれるに違いないと思っていました。エルサレムにイエス様がロバの子に乗って入城された時、「ホサナ、ホサナ！」と王として歓迎しました。しかし、イエス様のおっしゃる「時」とは、十字架の死によってもたらされる罪と死からの勝利の栄光の時のことでした。

一粒の麦のたとえ

イエス様は、「よく聞きなさい」と言って一粒の麦の話をされました。「麦の種は地面にまかれて死ななければ、新しい芽は出てこないでしょ。しかし、死んだなら芽が出て、実を結ぶようになります。そのように、わたしは自分の命を捨て、この世に新しい命を与え、救うのです」と、ご自分

の使命を説き明かされました。そして「ひとりひとりが、自分中心な生き方をするのでなく、神様第一の生き方をするなら永遠の命を得ることができるでしょう」と教えて下さいました。

イエス様の祈り

お話をしながら十字架の死を思うイエス様のお心はどんなに辛く苦しかったでしょう。「今わたしは心が騒いでいる」と心の内を明かされました。「父よ、この時からわたしをお救い下さい」と、できるならこの時が過ぎ去るようにとも思われたことでしょう。しかし「父よ、み名があがめられますように」と祈られ「わたしは、このために、この時に至ったのです」ときっぱり十字架を受け入れられました。その時、天から声があり、「わたしはすでに栄光をあらわした。そして更にそれをあらわすであろう」と神様の約束の声が響きました。イエス様は、神様の救いのご計画を実現するために十字架を目指して自分から進んで行かれたのです。私たちは、一粒の麦として死んでくださったイエス様の救いを受け入れ、永遠の命をいただく者となりましょう。

一粒の麦となった人のお話

一九五四年九月、北海道を襲った台風で、青函連絡船洞爺丸が沈没するという事故がありました。犠牲者の中にA・ストーンとD・リーパーという宣教師がいました。彼らは、救命道具のない婦人たちに自分たちの救命具を外して渡し、こう言ったそうです。「私たちはイエス様を信じて救われています。けれどもあなたがたは救われていません。助かったら、きっと教会へ行って、救われてください」。二人の姿は荒れ狂う波間に消えました。助かった婦人たちは後日、教会に行って救われたそうです。

また、北海道では、塩狩峠に差し掛かった汽車が突然暴走し、最後部の連結車が逆走しはじめ、そのままでは転覆してしまうという事故が発生しました。ちょうど、汽車に乗り合わせていた長野政雄という青年は、鉄道の職員でもあったので、ありとあらゆる努力をして客車を止めようとしましが、すべてが無駄でした。彼は、聖書を通して知った、イエス様が一粒の麦となって死んでくださったことを思い浮かべました。そして祈りつつ、乗客の命を救うため、線路に身を投じ命を差しだしたのです。私たちも一粒の麦となって人を生かすことができるなら何と幸いなことでしょう。

♪もちいたまえわが主よ♪（ホ113）

聖　書　ヨハネ13・1〜15
テーマ　洗足の恵み

序論　（石田高保）

洗足の出来事を通して、人の成長のために仕える人が、人の上に立つのにふさわしく、影響力のある人物となることを教えられる。

一、イエス様に足を洗っていただく

イエス様のし始めたことを見て、弟子たちはみんな唖然（あ）とした。なぜなら上着を脱いで手ぬぐいを取って腰に巻き、水をたらいに入れて人の足を洗い、それを手ぬぐいで拭いたからである。それは奴隷のする事であって、決して自由人のする事ではなかったから。ペテロをはじめ弟子たちはどんなにか戸惑い、畏（おそ）れ多く感じたことだろう。

なぜイエス様はこのような度肝を抜くことをされたのか。しかも最後の晩餐の席である。いわゆる洗足の出来事は、14節に記されているように、弟子たちに互いに足を洗い合うべきことを教えた「手本」実物教訓というだけではない。それならば最後の晩餐まで待つことなく、もっと前に弟子の足を洗ってもよかった。十字架にかかる前の晩にこのことをされたのは、これから流すイエス様の血が、弟子たちの、そして全人類の罪を洗いきよめる力のあることを示すためである。

まずイエス様には、ご自分の死が近づいていること、いよいよ十字架にかかって救いの道を開く時の間近なことがわかっていた。〈自分は神から出てきて、神にかえろうとしていることを思い〉。奴隷の格好をし、奴隷の仕事をすることによって、ご自分が究極の奴隷であることを示そうとした。究極の奴隷とは、自分の罪のない命を差し出すことによって、人類に救いの道を開く十字架の姿である。〈最後まで（徹底的に）愛しとおされた〉、十字架を暗示する究極の愛を示された。神から愛していただくために私たちのできることは何一つない、という言葉がある。

弟子たちはすでに救われていた人たちであった。けれどもイエス様はあえて弟子たちの足を洗っておられる。それならば足を洗っていただかなくてもいいようなものだが、〈すでにからだを洗った者は、足のほかは洗う必要がない。全身がきれいなのだから〉、弟子たちに対して全身がきれいだと言っているのは、すでに救われていることを意味す

る。また洗礼を受けることによって救いの確信が与えられていることも。この当時、人の家に食事に招かれると、全身を洗ってから出かけた。道は誇りっぽいから足が汚れるので、玄関で奴隷に洗ってもらった。私たちも全身ではなく足だけはイエス様に洗っていただく必要がある。日々さまざまな汚れを受けており、生活の中でいろいろと罪を犯している。しかしその汚れや罪は、そのたびごとに悔い改めれば、イエス様の血によって洗いきよめていただける。「御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである」（Ⅰヨハネ1・7）。

二、互いに足を洗い合う

イエス様に罪を赦していただいた人は、イエス様によって日々足を洗っていただくことができる。罪や汚れをきよめ続けていただける。しかし今度は私たちがお互いに足を洗い合う番である。〈わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ〉、このあと弟子たちがお互いの足を洗い合ったとか、初代教会で洗足の儀式が始まったという記事はないが、彼らには鮮烈な記憶として残ったに違いない。そしてお互いの間にやっかみや、いがみ合いや、さばく思いが起きたとき、この出来事を思い出しては悔い改め、へりくだって他の弟子に仕えて行っただろう。そして歴代の教会では繰り返し説教で語られたに違いない。

結論

この出来事ほど、イエス様が説き、実践されたリーダーシップが記されたものはない。「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕とならねばならない。人の子が来たのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである」（マルコ10・43〜45）。人間は普通、何とかして人の上に立とう、人を動かそう、支配しようと思うもの。しかし神の国の価値観はより良く人に仕える人が偉い人である。私たちも身の周りの人が、イエス様とつながって自立し、成長できるように仕えるのである。また人の足を洗うとは、その人の間違いや弱さや罪をカバーしてあげることでもある。特に家族の間で必要ではないか。さて、あなたは誰の足を洗おうと決心するだろうか。

研究資料

（宮澤清志）

先週の第12章に続いて、第13章が開かれる。実は、この13章からは、ヨハネのみ記している個所である（17章まで）。この告別説教の幕開けは、イエスが弟子たちの足を洗われた場面から始まる。

テキスト

1 この節は、13章以下の受難物語全体の序文と見ることができる。**過越の祭** ユダヤ人の三大祭りのひとつで、旧約聖書の出エジプトを記念して守った。神の救いの恵みのしるしとして行う重要な祭りであった。この日には、一歳の雄の小羊をほふり、その血を入口の柱と鴨居に塗り、肉を過越の小羊として食べた。この過越の小羊はキリストの型であり（ヨハネ1・29）、またこの祭には多くの人々がエルサレムに足を運ぶ祭でもあったことから、神はこの日をあえて選ばれてキリストの十字架の「時」（1）としたのであろう。**この世を去って父のみもとに行くべき自分の時** ヨハネにとって「死」とは、この地上での働きを終えて「父の家」に行く、という「旅」であり、我が家へと帰ることなのである。**世にいる自分の者たち** イエスを受け入れた、少数の信者の群れ、すなわち教会（エペソ5・25）。**最後まで愛し通された** 最後までという言葉は「極限まで」という意味と、「最後まで」という意味がある。新共同訳や新改訳では前者が、口語訳では後者の意味が強く響く。

2 ここからが洗足物語の序論となる。

4〜5 この4節から、イエスの洗足物語の本題へと入っていく。この個所では、イエスの洗足の情景を詳しく描写する。洗足は、古代では一般に奴隷の仕事とされてきた。しかも、イスラエルでは異教徒の奴隷にしかさせなかった仕事である。

6〜7 イエスの洗足が進み、いよいよその順番がペテロにくる。そのペテロが当然の疑問をイエスにぶつける。**あなたがわたしの足をお洗いになるのですか** ここでは「あなた」と「わたし」が強調されている。「あなたのようなお方が」「わたしのような者の」足をお洗いになるのですか、というような意味であろう。このみ言葉は、古来より多くのキリスト者が理解できない事柄について、解決の鍵を与えてきた言葉である。神の永遠のご計画、神が私たちに求めておられる意図は、聖霊を通して

でなければ私たちは知ることはできないのである。同時にそれらを私たちが知ることは、神の「時」があるのである。**あとで**　真理の御霊（ヨハネ16・13）である聖霊の到来の後、という意味。

8　ペテロの次なる問い。ここでもやはり「わたしの」が強調され、「他の弟子たちの足はお洗いになっても、このわたしの足だけは…」というような意味になる。**もしわたしがあなたの足を洗わないなら…**　このイエスの行為は、人間的な愛の行為ではなく、人となられた神の子としての奉仕なのである。この行為を頑として退けようとするペテロの行為は、イエスの差し出しておられる愛の手そのものを退け、彼の救いそのものを拒否したのである。

9〜10　ペテロはまだ、イエスの洗足が全身をきよくする象徴としての行為であることを悟っていなかった。だからひとたびイエスの救いに与り、その汚れを洗いきよめていただいた者は、全身がきよいのであって、今さら手や頭まで個別に洗う必要はない、というのである。

11　10節後半からは、イエスはユダの裏切りを既に予見した上でこの言葉を語っている。では、私たちはこのイエスの言葉をどのように理解すべきであろうか。10節後半の言葉は、イエスのユダに対する愛と、ユダに対する救いの道、そして何よりユダへの悔い改めの機会を与えた言葉であろうと思う。しかし、ユダは自らその道を閉ざしてしまったのである。

12〜15　12節以下は、イエスの洗足についての説話的部分である。「教師」「主」とは、単にユダヤ人の呼称というよりも、イエスへの神的告白であろう。「教師」「主」であるお方から最高の愛の奉仕を受けたしもべであるキリスト者は、同じ仲間であるしもべたちを愛する責任がある、というのである。キリスト教倫理の中心は、キリストご自身の模範に生きることである。「わたし（主）があなたがたにしたこと」（12）を悟り、「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように」というイエスの「手本」（15）に従って歩むことが、キリストのしもべとして生きる者の道であるというのである。

参考図書　ジョン・C・ライル『ライル福音書講解　ヨハネ1』（聖書図書刊行会）他

聖　書　ヨハネ13・1〜15
タイトル　洗足の恵み
暗唱聖句　もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる。　ヨハネ13・8
目　標　キリストの十字架の血による罪の赦しの恵みに生きる者となる。

導入

（水野晶子）

毎日、学校ではお掃除をします。一生懸命やっている子もあれば、友だちと遊んでいて、ちっとも掃除しない子もいます。先生が大切なお話をしている時に隣の人としゃべっていたり、自分勝手なことをしていて、話を聞こうとしない人もいます。みなさんはどうですか？

イエス様がなさったこと

イエス様の弟子たちも自分のことで頭がいっぱいで、すべきこともしないで、ざわざわした気持のまま、大切な食事会に出ていました。

その時です。イエス様は突然、立ち上がり、上着を脱いで、手ぬぐいをとって腰に巻き、たらいに水を入れました。ユダヤでは家に入る前に、身分の低い奴隷がこのスタイルで、家に入る人の足を洗いました。なんとイエス様が弟子たちのしもべとなって、足を洗い、手ぬぐいで拭き始めました。弟子たちは「誰が弟子の中で一番偉いか」と議論していたので、足を洗う奴隷の仕事など自分の仕事でないと思っていたのです。ところがイエス様が、一人一人に「あなたの足を出しなさい」と、埃にまみれた汚い足を丁寧に洗い始められたのです。

ペテロの番になった時、「主よ、あなたがわたしの足をお洗いになるのですか？」「そうだよペテロ、わたしのしていることは今あなたにはわからないが、後でわかるようになるだろう」とイエス様が答えられました。しかしペテロは「とんでもないことです。私の足は決して洗わないでください」と断りました。するとイエス様は、「もしもわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる」と言われたので、今度はあわてて、「主よ、では、足だけではなく、どうぞ、手も頭も」とお願いしました。しかし、イエス様は「すでにからだを洗った者は、足のほかは洗う必要がない。全身がきれいなのだから。あなたがたはきれいなのだ。しか

しみんながそうなのではない」と言われ、ペテロの足も洗われました。イスカリオテのユダの足も洗われました。ユダが悪魔に負けて、イエス様を裏切ろうとしていることを知りながら、足を洗われたのです。イエス様は、十字架にかかって死ぬ時が来たことをご存知でした。弟子たちと別れる時が来ていることを思い、イエス様の愛が弟子たちに伝わるように、十字架の死が何を意味するかがわかるように、奴隷となって足を洗われたのです。イエス様は罪がないのに奴隷となって、十字架にかかられ、その流された血によってすべての人の罪が赦されることを示されました。

私たちのすること

イエス様は弟子たちの足を洗われ、再び席に着かれました。今度は、弟子たちの心が静まり、イエス様の言葉に耳を傾けることができました。イエス様は弟子たちに、「あなたがたもまた、互いに足を洗い合うべきである」と命じられました。イエス様が教師であり、主であるのに、へりくだって奴隷となって足を洗われたのです。まして私たちは、お互いの中にあるねたみ、競争心、憎しみ、裁く思いなどを悔い改め、相手を赦し、受け入れ、愛するように命じられたのです。

主がなさったように

ある年の受難週に、ハワイで国際的な平和集会がありました。アメリカ、台湾、韓国、日本から集まってきて、祈りの時を持ちました。木曜日にたくさんのバケツとタオルが用意され、水がバケツに入り、牧師先生が一人一人の足を洗ったのです。足を洗ってもらっている人は泣いていました。日本の国は戦争で、ハワイ、台湾、韓国の人々にひどいことをしました。その苦しみを体験した人たちもいました。しかし、その時、様々な憎しみや争いがイエス様によって赦され、涙ながらに互いに和解することができたのです。

イエス様が手で触れてわかるように、愛を表してくださいました。十字架の愛はとてつもなく大きく、すべての罪を赦し、いがみ合っている人間の心を温かい愛で溶かすことができるのです。イエス様がなさったように、互いに愛し合い仕える者ならせていただきましょう。

♪あいのしゅイエスは♪（こ改124）

聖　書　ヨハネ14・1〜6
テーマ　天国の住まい

（高橋頼男）

序論

十字架の死を前にして、主イエスは、弟子たちを置いてどこかに行ってしまうと言われました。さらに、ユダの裏切りやペテロが主を否定することを語られたとき、弟子たちの心は激しく動揺しました。その時、イエスは〈あなたがたは、心を騒がせないがよい〉と言われ、主がご自分の弟子たちのために用意しておられる素晴らしい備えについて語られたのです。

このところから平安の根拠と、主が用意してくださる天国の備えについて学びましょう。

一、神を信じる（1）

平安は、自分よりもはるかに大きな方、信頼すべき方、すなわち神を知り神に信頼することから来ます。私たちが心を騒がせる時、きまって自分自身を見つめて心細くなり、周囲の人を見て失望し、不安定な状況に脅かされています。人は、「大丈夫だよ」とか、「あなたよりもっと大変な人がいる」と言いますが、何の慰めにも力にもなりません。

しかし、主イエスは、そのような私たちに、〈神を信じ、またわたしを信じなさい〉と力強くおっしゃってくださいます。今も、天地とそのすべてを支配し、小さく弱い存在にすぎないわたしたち一人一人に心を配り、豊かにかえりみていてくださる生ける神を仰ぎましょう。十字架にいのちを注いで罪から救い、永遠のいのちを与えて御国を保証し、永遠の住まいを備えてくださる神にこそ信頼しましょう。

二、天国の住まいの備えを信じる（2〜3）

平安は未来観が確定しているところから来ます。永遠の住まいが約束され備えられている私たちは、もはや「ホームレス」ではありません。主の手によって天の住まいが備えられているとは、何という幸いな大いなる慰めでしょう。地上の生涯の終わりをせめて安らかに暮らすために、世人が切に求める終の棲家ではなく、主は、さらにその先の永遠の住まいを保証していてくださるのです。

この永遠の住まいを信じてそれを手に入れた者は、その地上生活が一変します。ヘブル人の手紙の中に証しされた信仰の勇者たちは、その信仰のゆえに、地上では旅人であり寄留者であることを自らの生活の中で言い表わしまし

た。（ヘブル11・13〜16）アブラハムは、多くの資産を持つことを許されながら、決してそれに頼らず、定住生活に甘んじることをせず、むしろ高地を選び、生涯、天幕生活を貫きました。それは、彼が天に焦がれ天国を故郷として待ち望む人だったからです。彼の地上における価値観や人生観は、ソドムを選んだ甥ロトとの比較やソドム王の申し出を毅然と拒否したことに見られます。（創世記13〜14章）私たちも真にそのような生き方をしたいものです。天国は口先だけの希望であってはなりません。天国を告白しながら、その実、地上のものに心を奪われていてはなりません。「地上では旅人であり寄留者であることを、自ら言いあらわした」（ヘブル11・13）とあるように、私たちも地上生活の中に、自らが地上の旅人でありこの世では寄留者であることを明確に証しする生活を送るべきです。天国を目指す生き方は、時間（神礼拝）と財（献金）と賜物（奉仕）の用い方にハッキリと表わされるはずです。御国の価値観をもって大胆に生きる者となりましょう。主が備えてくださる天国の住まい、その場所を思い描き、さらに優れる天にある故郷にあこがれつつ生きるのです（ヘブル11・8〜16）。

三、天国への道であるキリストを信じる（6）

平安は、未来への確かな道しるべを持つことから来ます。神を離れ、エデンの園から追い出されて以来、人は心のふるさと、魂の永遠の安らぎの場所を失い魂のさすらい人となってしまいました。以来、何をしても、どれだけ所有しても、どんな者になったとしても、虚無、不満、不安は尽きず、将来に対する恐れがあります。このような悲惨な人間の現実からどうしたらもう一度神のもとに立ち帰ることが出来るでしょうか。〈わたしは道であり、真理であり、命である〉と言われるキリストこそ唯一の道です。主は贖いを成し遂げ、天に昇って私たちのために永遠の住まいを設けてくださいました。キリストとその御言葉にしたがい、道そのものであるキリストに信頼し、キリストの通られた道を踏み従い、天国への道を真っすぐに歩み続けましょう。

結論

天国への唯一の道であるキリストを信じ、御国の希望を持って生きる者となりましょう。「あなたがたのうちにいますキリスト…、栄光の望み」（コロサイ1・27）。

研究資料

（中島啓一）

テキスト

1　心を騒がせないがよい　「騒がせる」は12・27、13・21と同じ表現。イエスが弟子たちの一人の裏切りを予告されるとき、「その心が騒ぎ」（13・21）とある。弟子たちは、その予告を聞いただけでも心を騒がせて当然であるのに、さらにイエスが自らの死を予告し、「あなたがたはわたしの行く所に来ることはできない」（13・33）と告げられた。そんな騒然とした状況の中で、この勧告はなされたのである。**神を信じ、またわたしを信じなさい**　騒ぐことのない平安な心は、神と、神が遣わされた御子への信仰から生まれる。神、そしてイエスを信じることは、それぞれ後述の「行き先」、「経路、手段」と関連するのだろう。なお、この命令は現在形であり「信じ続けよ」という意味である。だが、この時の弟子たちにとって、イエスを信じ続けることは極めて難しいことであった。なぜならイエスはこれから十字架刑に処せられるからである。「彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた」（ローマ4・18）というアブラハムのような信仰をもってでしか、そんな状況に打ち勝つことはできない。

2　わたしの父の家　「父の家」はふつう神殿を指す（2・16）。そこは神がその民と共に永遠に住まわれる所（エゼキエル43・7）であるが、ここでは、その地上の神殿が指し示す本体、「生ける神の都、天にあるエルサレム」（ヘブル12・22）のことである（黙示録21・9～22・5）。**すまいがたくさんある**　「すまい」（ギ）モネー）は「とどまる、住む」（ギ）メノー、15・5では「つながる」）の派生語で、宿や仮住まいではなく、とどまり続ける所を指す。弟子たちが心を騒がせずにいられるように、イエスはまずご自身と彼らの「行き先」について語られた。**あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから**　父の家は当然すでに存在している。そこに場所を用意しに行くことは、信じる者たちがそこに行くために、イエスがなさねばならないことがあることを示している。

3　またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう　これがいつのことを指すのかについては議論がある。「再臨」だけでなく、「復活のとき」、続く箇所で述べられる「助け主の到来」（16）や「父、子と信じる者との交わり」（20）、そしてそれらの全部あるいは一部を複合的に

含んでいるという解釈もある。これらの考え方を排除する必要はないが、「終りの日」（6・39）の再臨を指すと考えるのが最も自然で、妥当な解釈であろう。

4 わたしがどこへ行くのか、その道はあなたがたにわかっている ここで主が「あなたがたにわかっている」と言われるのは（これも知っているはずだが）行き先ではなく、そこへ至る道である。

5 どこへおいでになるのか、わたしたちにはわかりません その場所まで行ってすまいを用意し、また迎えに戻ってきてくださるお方が目の前にいるのに、トマスは、イエスの語った二つの要素、「行き先」と「経路、手段」を別々に捉え、後者にしか目を向けなかったのである。

6 わたしは道であり、真理であり、命である 父の家へと至る道（4）は、イエスご自身であるという力強い宣言。道なるイエスは、神と人とをつなぐ仲保者である。ヨハネ福音書の冒頭で「初めに言があった」（1・1）と宣言される「言」（ギ）ロゴス）なるお方は、神と人とを結ぶ「道」となるため、「肉体となり、わたしたちのうちに宿っ」（14）てくださった。この方は「すべての人を照すまことの光」（＝真理）（9）であり、「この言に命があった」（＝命）（4）のである。このように道なるイエスの仲保者としての使命には、真理と命という二つの側面があることは、福音書の冒頭からすでに示されていたのである。**だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない** もしこれを排他的と感じるならば、これを語った方が受肉された神の言、ただひとり、父なる神を示し、あらわす方であることを心にとめるべきである。「すべてのものは、これ（＝言）によってできた」（3）のである。神が（受肉前、後を問わず）この言によらずしては人にご自身をあらわされないとするならば、まして、このお方によらずして人が神に近づく方法などあるはずがないのである。そのお方が、こともあろうに人となってくださった。それは、まさに私たちが神のもとに行くためだったのである。このことを理解するならば、この宣言は排他的でないばかりか、むしろ本来ならば除外されるはずであったすべての人を見事に包み込んでいく、極めて包含的なものと言えるのである。

参考図書 注解書 F. F. Bruce (Eerdmans), B. Lindars (New Century Bible), G. R. Beasley-Murray (Word) 他。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT

23日 礼拝メッセージ例

聖　書　ヨハネ14・1〜6
タイトル　天の住まい
暗唱聖句　わたしの父の家には、すまいがたくさんある。　ヨハネ14・2
目　標　キリストを信じ、備えられた天の住まいに迎えられる者となる。

導入

（水野晶子）

みなさんはハウジングセンター（住宅展示場）に行ったことがありますか。いろいろな住宅会社のモデルハウスがいっぱい建っていて、まるで新しい町のようですね。美しい外観、最新の設備が整っていて、いろんな夢が広がり、住みたいなと思います。見て歩くだけならただですが、家を建てるとなると、それはそれはたくさんのお金がかかります。でも、地震も台風も津波も心配しなくていい、安心して暮らせる家が欲しいですね。

すばらしい約束

イエス様は弟子たちの足を洗い、弟子たちと最後の食事をされました。イエス様はその席でどうしても伝えておかなければならない大切なメッセージがあったのです。弟子たちの中に、裏切る者がいること、その人によって間もなく捕らえられ、十字架にかけられることを伝えました。イエス様は弟子たちが動揺することを心配して、「どんなことがあってもあわてたりしないで、神様を信じ、イエス様を信じなさい」と言われました。私たちも、これからどうなるかわからなくて心配したり、不安で心がいっぱいになる時、父なる神様とイエス様を信じ続ければ大丈夫です。何も心配することはありません。

さらにイエス様は、みんなが安心して永遠に暮らすことができる天国の家を用意するために帰るのだと言われました。天国の家ってどんな家でしょう？　ハウジングセンターの家がどんなにステキでも私たちの家ではありません。立派なホテルや公営住宅は仮住まいにすぎません。天国の住まいは、ずっとイエス様と一緒にいることのできる、一番安心できる幸せなところです。

天国の住まいに入るには

天国の住まいに入るにはたくさんのお金が必要ですか？　公営住宅のようにくじ引きして当選しなければ入れないのかな？　入る資格や条件やテストがあったらどうしよう…？　はーい。天国に入る道はただ一つです。イエス様

は、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」と言われました。

アダムさんとエバさんが神様に従わなかったことによって、罪のばい菌が人間を汚したので、そのままでは、天国に入ることはできなくなりました。だから、私たちの代わりに、イエス様が十字架にかかって、罪の罰を受けて、死んでくださったのです。そのことによって、神様と私たちの間に道を通してくださいました。イエス様は、私たちを照らす真理の光となって、私たちを天国まで導き、私たちに永遠の命を与えてくださいました。だから、イエス様こそ私たちを天国に導いてくださる唯一の方です。このイエス様を救い主と信じれば、天国の住まいに入れるのです。

天国に希望を持った人

キリスト教書店を経営していたAさんが、クリスマス前に末期の胃がんとわかり、手術をしましたが手遅れでした。ホスピスに入り、毎日痛みを抱えながら、イヤホンで聞くことのできる聖書のメッセージを楽しみにしていました。ある日、奥さんに「僕が暗闇の中を通る時も一緒にいてくれるか?」と聞きました。奥さんは「もちろん、いつも一緒よ。ずっと一緒ですよ」と答えました。Aさんは安心してとってもうれしそうでした。意識が段々もうろうとしてくる中で、いつものように聖書のメッセージに耳を傾けていた時、突然、「こんな放蕩息子の私なんですよ。いいんですか? こんな私でいいんですね。それなら、わかりました。僕、ついて行きます」と言うと、さらに手を天に向けて、「お母さん、家族三人で天国へ行こう。アーメン、アーメン」と言って、意識がなくなりました。その時語られていたメッセージは、よみがえられたイエス様が、エマオに行く道で二人の弟子に会い、一緒に歩かれたところのお話だったそうです。Aさんは死の直前に、道、真理、命、であるよみがえられたイエス様にお会いして、天国の家で三人家族が一緒に暮らせる希望を持ちました。二週間後、Aさんは、イエス様に手を取っていただいて、天国に帰っていかれました。

まとめ

イエス様以外に、天国に行く道はありません。今日、イエス様を信じて従っていきましょう。

♪ワンウェイ♪（GS10）

聖　書　ヨハネ15・1〜8
テーマ　実を豊かに結ぶ

（福井文彦）

序論

イエスが語られた有名なたとえです。イエスはこのたとえの中でご自分と弟子（クリスチャン）の関係はぶどうの木とその枝の関係であると言われました。ぶどうの木の枝が幹につながっていて実を結ぶように、イエスに信仰によって結合しているとき、霊的な実を豊かに結ぶ者となのです。

一、父なる神は農夫

イエスは〈わたしの父は農夫である〉と言われました。ぶどうの枝において大切なことは、実を結ぶか結ばないかということです。実を結ばない枝は、農夫である父なる神がそれを取り除いてしまわれます。なぜ実を結ばないかというと、枝が幹に堅く結びついていないからです。堅く結びついていれば、栄養分が幹から枝に流れてきて、実を結ぶのです。

実を結ばないで取り除かれた実例は、イスカリオテのユダです。彼は、イエスを個人的に信じ弟子として生活しながらも、欲にかられて誘惑に陥ったのです。その結果、イエスを裏切って、主を殺そうとたくらんでいる敵の手に売り渡しました（ヨハネ18・3〜、マタイ3・10）。しかし、実を結ぶ者に対して、神はもっと豊かに実を結ばせるため、〈手入れしてこれをきれいになさる〉のです。これは、はさみを入れないと、余分な枝に栄養分が行ってしまって、豊かに実を結ばなくなるからです。はさみを入れるとは、訓練を意味し、具体的には苦難や試練という形で、私たちの身に起こります。神が剪定（せんてい）とか刈り込みの訓練をされるのは、実を結ぶ見込みがあるからです（ヘブル12・11）。

二、キリストとの結合

イエスはご自分をぶどうの木に、私たちを枝にたとえて、〈枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていなければ実を結ぶことができない〉と言われました。

それでは、キリストとクリスチャンの結合の条件は何でしょうか。

第一のことは、「信仰」です。イエスは〈わたしの言葉

があなたがたにとどまっているなら〉と言われました。パウロは「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」（ローマ10・17）と述べています。ですから、み言葉が私たちのうちにとどまり、たえず私たちを養うならば、私たちは信仰によってキリストのうちにとどまり、またキリストは、私たちのうちにとどまり続けてくださるのです。

第二のことは、愛のゆえに、いましめを守ることです（10）。イエスにとどまるとは、イエスの愛にとどまることであるとともに（9）、その戒めを守ることです。すなわち、み言葉に従順であることです（ヨハネ14・23）。

三、豊かな結実

私たちがイエスのみ言葉にとどまり、イエスの愛にとどまり、そしてイエスの戒めを守ることを継続的に生活の中で維持する時、豊かな実を結びます。それで、イエスは〈わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる〉と言われるのです。

では、どのような実を結ぶのでしょうか。

第一に、御霊の実です。「御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない」（ガラテヤ5・22～23）とあるとおりです。

第二に、祈りが聞かれることです。〈あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるよい。そうすれば、与えられるであろう〉。この祈りのゆえに、多くの実を結ぶのです。

第三に、喜びに満たされることです。「わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである」（ヨハネ15・11）。失望、落胆、悲しみ、不平、不満にさいなまれる生涯ではなく、常に喜びを失わない生涯、喜びの湧き上がる生涯です。それは神の栄光を現すことになるのです。

結論

私たちがキリストとの深い交わりを持ち、キリストに結合し続けるなら、実を豊かに結びます。そのことを通して神の栄光を現し、神をお喜ばせすることになるのです。

研究資料

（宮澤清志）

ヨハネによる福音書13章から、イエスは十字架を前にして、遺（のこ）される弟子たちに対して愛の説教をされた。この個所はその中の「ぶどうの木のたとえ」といわれる個所である。特に前2章と異なる点は、この章はそれまでのイエスと他の弟子との対話形式ではなく、イエスの直接の宣言とでも言える形で記されていることである。

また、この個所は「わたしは～である」（エゴー・エイミ）の七番目の宣言でもある。基本的に、イエスの使信は、主ご自身であった。イエスは単に福音をのべ伝えるために来られたのではなく、主ご自身が福音そのものであった。ギリシャ語では、エゴーもエイミも、それだけで「わたしは～です」という意味を持つ。しかし、それらを重ねることによって、「わたしこそ～である」と、他の何者でもなく、イエスこそが福音そのものであることを指し示しているのである。

テキスト

1　わたしはまことのぶどうの木　前述したとおり「わたしは～である」（エゴー・エイミ）とのイエスの主張の七番目である。しかし、この個所と10章の章句は他の章句とは異なるという主張がある。それは「よい」「まことの」という形容詞を伴って、イエスの主張を独自的・挑発的に表現するというのである。従ってここでは「まことのぶどうの木」が主語であり、「エゴー・エイミ」は述語であるとみて、「まことのぶどうの木とは、まさにこのわたしのことなのだ」という意味になるのである。

2　わたしにつながっている枝で実を結ばないものは…　エゼキエル15・1～4には、主のイスラエルに対する裁きの様子が描かれている。しかし、これらの個所は、裁きのための裁きではなく、神の愛のほとばしりであり、また「わたしの枝」と自称しているイスラエルの民に対するテストの意味が込められている。すなわち、もし本当に主につながっているのならば、御霊の実を結ぶはずである、というのである。**つながる**（ギ）エン　とは、「～のうちに」という意味を持つ言葉で、「キリストにつながる」とは、「キリストのうちにある」、あるいは「キリストにとどまる」（新改訳、他）という意味になる。**実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために…**　一方、たとえ実を結ぶ枝であっても、より良い実を結ばせるた

めに剪定（せんてい）されるという。いずれにしても、この両者は神の愛から出たものである。

3　あなたがたは、わたしが語った言葉によって既にきよくされている　この句は13・10のみ言葉を思い起こさせる。主にある者は、主の言葉によってきよくされているのである。この「言葉」とは、単数形が用いられており、「この言葉」すなわち神の言葉の全体、あるいは「福音」そのものという意味であろう。

4〜5　以上3節を受けての締めくくりの意味を持つ個所である。イエスはまことのぶどうの木、父は農夫、あなたがたはぶどうの木、という、この三者の関係が示された。そして、この三者の関係は「つながる」という、生命的関係である。ここでは特に、**つながる**（ギ）メノーなどの意味を持つ。動かされないでしっかりと留まっている場、それはまことのぶどうの木であるイエスご自身であり、キリストとの霊的・生命的な関係を積極的に維持し続けることが、実りの唯一の道である。

6　人がわたしにつながっていないならば、枝のように外に投げすてられて枯れる　2節同様、厳しい警告が発せられる。このような厳しい警告が発せられたのは、イスカリオテのユダのような背教者を暗示したものであろうとの考え方がある。キリストのうちに留まらず、キリストを信じる信仰の生活を生きることを拒否する者の結果が描かれる。イエスに背を向け、神の栄光のために実を結ばなかったキリスト者の最後も同様であろう。

7　あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば…　キリスト者の祈りに力があり、またその祈りがかなえられるのは、その祈りがキリスト者のうちにおられるキリストご自身のささげる祈りにほかならないからである。この祈りのゆえに、キリスト者は多くの実を結ぶことができる。

8　あなたがたが実を豊かに結び、そしてわたしの弟子となるならば、…父は栄光をお受けになるであろう　イエスに従う者が、み言葉を通してキリストに結びつき、多くの実を結ぶ時、栄光をお受けになるのは父なる神である。父なる神は農夫であるゆえに、その結実、収穫は、農夫である神の名誉であり、喜びでもある。**結ぶ**（ギ）フェレテ）　実を結び続けることを指す。

参考図書　3月9日分と同じ。

聖　書　ヨハネ15・1〜8
タイトル　豊かに実を結ぼう！
暗唱聖句　わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。　ヨハネ15・5
目　標　キリストにつながり、豊かな実を結ぶ者となる。

導入

いよいよ三月も終わりです。幼稚園年長のお友だちは小学校へ、小学六年生は中学へと新しい旅立ちの日を迎えますね。みんなが赤ちゃんだった頃を思い浮かべてみましょう。ちっちゃな手、かわいらしい足。思い出の手型や足型のスタンプが残してある友だちもいるかもしれませんね。一人ひとりが、身体だけでなく心もぐんぐん育って、神様を畏れ、人を愛する、そんな豊かな心の実を結ぶ人になってほしいと祈っています。

（松浦みち子）

どうしたら実を結ぶ人になれるの？

イエス様はたとえ話をなさって、どうしたら実を豊かに結ぶ人になれるかを教えてくださいました。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」と、ぶどうの木の話をされました。ぶどうの木を見たことがありますか？　幹から枝がぐんぐん伸びて、その枝にぶどうの実がぶら下がるようになります。ここに一本のぶどうの木があります（絵を見せながら話す）。大地にしっかり根をおろした立派な木ですね。この木から枝が伸び、春になると葉が出てきます。あっちにもこっちにもというふうに勢いよく葉が茂ってきました。たくさん実がなるようにとお百姓さんは根っこに肥やしをやったり、いろいろお世話します。やがて小さな花が咲き、夏の初めには小さい小さい実がなり始めます。夏の終わり頃から、その実はどんどん大きくなって甘くておいしいぶどうになってきます。もし、枝が折れてぶらぶらしてよく繋がっていないと、根から栄養が届きません。もちろん実もなりません。そんな枝は農夫が切って捨ててしまいます。また、繋がっていても実を結ばない枝は、おいしい大きな実を結ばせるために刈り込みをして取り除くことがあります。それは、もっと豊かに実らせるためには必要なことなのです。

イエス様は、ご自分をぶどうの木に、神様を信じる人をその枝にたとえられました。私たちがイエス様にしっ

かり繋がっているならば、イエス様から豊かな命の水をもらって、よい実を結ぶことができます。でも、イエス様から離れてしまうと、実を結ぶことができなくなってしまいます。

繋がり続けよう！

せっかく教会にきてイエス様を信じたのに、残念なことに、別の楽しいことに心奪われてイエス様から離れてしまうお友だちもいます。しかし、私たちは実を結ぶためにしっかりイエス様に繋がり続けましょう。まず、そのために大切なことは、イエス様を救い主と信じ神の子となることです。次に、枝が幹から栄養分をもらうように、イエス様のみ言葉によって養われることが大切です。神様はみ言葉を通して、私たちに語ってくださいます。どうしたらよいか迷う時、悪魔の誘惑に負けそうになった時、寂しい時やつらい時、み言葉によって、神様が一緒にいてくださることを知って勇気づけられます。次はお祈りすることです。お友だちでも、仲良くいつも交わっていると相手の気持ちが分かってきますね。そのように、いつも神様に祈っているとみ心が分かるようになってきます。神様は農夫のように、私たちが実を良く結ぶようにと、枝を刈り込みされる時があります。それは、私たちにとってつらいこと、大切なものを捨てなければならないことかもしれません。でも、豊かな実りのためには必要なことなのです。

良い実を結んだなら

「木はそれぞれ、その実でわかる」（ルカ6・44）と記されています。「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」（ガラテヤ5・22〜23）などの良い実を結ぶことによって、人々は私たちがイエス様という木にしっかり繋がっていることが分かるのです。人の嫌がる仕事を喜んでしたり、人が見ていなくても神様が見ていてくださるからと、忠実に歩むことなどを通して、聖書を知らない人々でも、神様がどんなに素晴しい方であるかを知るようになるのです。

朝ごとに、「イエス様、どうぞ良い実を結ぶわたしにしてください」と祈りましょう。そして、夕ごとに「私の罪をゆるし、悪い部分を取り除いて神様に喜ばれる者としてください」と祈りましょう。あなたを通して神様の栄光が現されますように。

♪おおしくあれ♪（ふ82、ホ106、イン77、新聖歌486）

牧羊ひろば

知多教会　教会学校

●知多教会の沿革

知多教会は一九五三年（昭和二八年）、日本伝道隊Ｐ・Ｔ・ルーク宣教師夫妻の開拓によって始められた教会です。以来、知多市内の寺本、朝倉、古見といった場所を経て、一九八五年（昭和六〇年）つつじが丘に前の会堂が与えられました。そしてその地での二七年にわたる教会活動の後、二〇一二年、そこから一・六キロ離れた八幡新町に現在の新会堂が完成しました。設立当初の寺本、朝倉といった地に近く、かつての場所に戻ってきたと言うこともできます。

●教会周辺の地理的、文化的背景

知多市は江戸時代に知多木綿が江戸でもてはやされ、昭和四〇代まで木綿産業が非常に盛んであった地です。現在は人口８万６千人、名古屋市まで電車で約20分のベッドタウンであり、臨海工業地帯には中部電力、出光、日鉱日石の石油工場、ＩＨＩの造船所などがある工業地域です。いちじくやたまねぎ、ペコロス（小たまねぎ）を名産とする農業も盛んで、古きと新しきが同居する町と言えます。前の会堂があったつつじが丘は新しく造成された団地でしたが、こちらは八幡、寺本という地名が表すとおり、寺社が多く、古くからの因習が根強く残っている土地です。それゆえ、子どもが教会に行くことを親が快く思わない、あるいは地元の寺社での祭儀が自治会や子ども会と結びついていることなど、以前の場所ではあまり感じなかったさまざまな戦いがあります。

●礼拝と分級

知多教会では教会学校の礼拝を日曜日の午前９時から行っています。ＣＳ教師は６名で、出席生徒は５名から多いときで10名ほどです。前半30分が全科そろっての礼拝、後半の30分は、幼稚科、小学科、中高科に分かれての分級です。礼拝では２曲賛美しますが、うち一曲はその月のテーマソングとして一か月間、毎週賛美します。ちなみに10月は「ラララ



ＣＳ礼拝風景

ジョイジョイ」でした。伴奏はエレクトーン、ピアノ、オカリナとバラエティに富んでいます。牧師もこの6月からやっとギターの練習を始めました。カホン（打楽器）を購入したところ、子どもたちがピアノやタンバリンと合わせて音遊びをするようになり、しめしめと思っています。

礼拝では、その日のプログラムに沿って、賛美の歌詞、主の祈り、暗唱聖句、フラッシュカードなどをプロジェクタで投影します。フラッシュカードは説教担当者が前もってカラーペンや色鉛筆で彩色し、それを牧師がスキャナで取り込んで加工します。最近のプロジェクタはパソコンなどがなくてもSDカードやUSBメモリから直接投影できるものが増えています。面倒な接続が不要ですのでおすすめです。年配のCS教師でも慣れた手つきでリモコンを操作し、フラッシュカードのページ送りをしながら、子どもたちに聖書のお話しをしています。

●年間の行事

主だった行事を紹介させていただきます。

①《**イースター・エッグハント**》　20個入りなどで売られている小さな卵型チョコをたくさん（100個ほど）、教会の中のあちらこちらに隠します。チョコが溶けて周りを汚してしまわないように、百均などで買えるチャック付の小袋で個装します。小さな子から始め、学年毎に時間差でスタートします。子どもたちが真剣に探しても、毎年いくつかは見つけきれず、数ヶ月後に発見されます。

②《**花の日**》　近くの朝倉駅と知多警察署をお花とカードをもって訪問します。駅は忙しいので賛美は割愛しますが、警察署では賛美を披露し、感謝のメッセージを伝えます。警察署は、以前はあまり歓迎されている雰囲気ではなく、写真もご遠慮くださいとのことだったのですが、数年前に署長さんが代わってからは歓迎ムードになり、今年はなんと、子どもたちへのプレゼントを用意して待っていてくださいました。


花の日

③《**子ども大会**》　毎年5月と12月に、子ども大会を開催しています。ゲーム、賛美、アニメ映画（こいぬのうんち、たいせつなきみシリーズ、三本の木など）、そして聖書のお話しといったプログラムです。12月はクリスマス子ども大会なので、サンタさんがやってきて、子どもたちにプレゼントを配っ

てくれます。二〇一二年に京都教区で綿菓子機を購入し、教区の教会で交代で使用するようになりました。以来、知多教会でも子ども大会の時には、綿菓子機が大活躍で、好評を博しています。

④《東海地区CSキャンプ》 夏のキャンプは名古屋教会、名古屋東教会と合同で行っています。二〇一二年までは、一泊二日でテントを張って行う本格的なキャンプをしていたのですが、奉仕者の高齢化などから、今までのようなキャンプを行うことが困難になり、二〇一三年から新しい試みで、日帰りのデイキャンプとなりました。会場の東海市しあわせ村は、無料のキャンプ兼バーベキュー場（要予約）、室内プール、公園などが一体となっており、一箇所ですべてのプログラムがこなせる素晴らしい場所です。午前中はバイブルタイムⅠ、お昼にはバーベキューを楽しみ、午後には温浴施設やスライダーもある室内プール、それからスイカ割りをして、夕方にバイブルタイムⅡをして解散というプログラムです。ワークAでおなじみの吉田美穂先生が講師としてお越しくださり、とても分かりやすく楽しいお話しをしてくださいました。一泊で慣れた子どもたちが日帰りで満足してくれるか心配でしたが、予想以上に好評だったようです。



東海地区ＣＳキャンプ

●教会学校の現状と将来への展望

多くの教会と同様、教会員の子ども・孫たちが中心の生徒構成です。それもまた感謝なことで、託されている子どもたちへの信仰継承に祈りつつ真剣に取り組んでいきたいと思います。前の地域から引き続き教会学校に来てくれるお友だちがいます。本当に感謝なことです。教会は移転しましたが、宣教地が変わったのではなく、宣教地が広がったと捉え、子ども大会のチラシなどは、以前のつつじが丘の小学校にも配布するようにしています。

先に、新しい地では、親の警戒心が強いと書きましたが、そのことも前向きに捉え、祈りつつ戦略を練っていくべきだと思います。子どもだけに狙いを定めるのではなく、親と子をセットにとらえ、福音を聞いていただく前に、教会に対する警戒を解いていただくためのプログラムを整えていく必要を感じています。何か良いアイデアがありましたら、ぜひ教えてくだされば幸いです。

（中島啓一）

『牧羊者』のご購読・ご利用について

＊分級用に、ワークA（幼稚科向け）、B（主に小学生1～3年生向け）、C（主に小学生4～6年生向け）を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各630円（税込）でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
http://cs.jccj.info/

＊ご注文は、日本イエス・キリスト教団（事務局）まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3－3－19
電　話（078）575－5511
ＦＡＸ（078）575－6611

―おわりに―

『牧羊者』二〇一三年度第Ⅳ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。

今回の教師養成講座は、前号に引き続き、神戸中央教会の勧士である鎌野健一兄に「分級を充実するために―教員の経験をもとにして―二」と題して執筆していただきました。「牧羊ひろば」は、知多教会のCSを紹介させていただきました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

聖書講解　高橋頼男師　福井文彦師　宮澤清志師　中島啓一師　松浦みち子師　飯田勝彦師　鎌野　幸師　竹崎光則師　上森恭子師　石田高保師　田中愛子師　松浦あん姉　藤井洋美師　丹羽　遥姉

研究資料　金井信生師　鎌野善三師　金井由嗣師　井上義実師　水野晶子師　吉田美穂師　勝田幸恵師　田中裕明師　後藤健一師　小野淳子師　佐藤由香姉　後藤栄子師　石田高保師　小平徳行師　和田　治師　金田ゆり師　丹羽　遥姉

メッセージ例　多田豊子師　長田栄一師　中島啓一師　加藤　清師　山田和幸師

ワーク（A）（B）（C）　中高科へのヒント　子ども聖書日課　フラッシュカード　み言葉カード・イラスト　ワープロ打ち込み　校正

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。（中島啓一）

聖書教育教案誌
牧羊者
二〇一三年度　Ⅳ巻
二〇一四年一月一日発行
発行所　日本イエス・キリスト教団
企画監修　日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室
神戸市兵庫区塚本通三―三―一九
電　話（〇七八）五七五―五五一一
ＦＡＸ（〇七八）五七五―六六一一
印刷所　菱三印刷株式会社
電　話（〇七八）五七六―三九六一
＊日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み